

粟 原 A 遺 跡

能越自動車道建設に伴う発掘調査報告Ⅱ

2006年3月

水見市教育委員会

粟 原 A 遺 跡

能越自動車道建設に伴う発掘調査報告Ⅱ

2006年3月

水見市教育委員会

序

富山湾を隔てた轟峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。

現在氷見市内では、富山県北西部及び能登地域と三大都市圏との交流を深め、沿線地域の産業、経済、文化の発展等を目指す能越自動車道の整備が進められています。その建設にあたっては市内の各地で新たな遺跡が発見され、大規模な発掘調査が実施されています。

氷見市教育委員会は、能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査として、平成16年度までに正保寺遺跡、粟原A遺跡の本発掘調査を実施いたしました。

この報告書はそのうちのひとつ、粟原A遺跡の本発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査結果が今後の文化財保護の一助となるとともに、地域の歴史への関心、理解につながることを願っております。

終わりに、発掘調査にあたりましては、関係者の皆様をはじめ、多くの方々にご指導、ご協力を賜りました。この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

氷見市教育委員会

教育長 中尾 俊雄

例　　言

- 1 本書は、平成15・16年度に実施した富山県氷見市粟原地内に所在する粟原A遺跡の発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、能越自動車道建設事業に先立ち、国土交通省の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査の期間・面積は次のとおりである。

試掘調査	期間 平成15年5月29日より平成15年6月2日	面積 約 289m ²
本調査	期間 平成15年6月12日より平成15年8月20日	面積 約 500m ²
本調査	期間 平成16年9月6日より平成16年12月17日	面積 約 1,230m ²
- 4 整理作業は、遺物洗浄、記入等基礎的な作業は調査と並行して実施し、作図等の報告書作成、編集作業は平成17年度に実施した。
- 5 調査は、国土交通省からの委託金で実施した。
- 6 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習課に置いた。事務担当者は次のとおりである。

平成15年度	課長：池田晃、主査：尾矢英一、主任：宮本英和、学芸員：林昭男（嘱託）
平成16年度	課長：池田晃、主査：尾矢英一、主任：宮本英和、 学芸員：河竹明子（嘱託）、大高崎泰明（嘱託）
平成17年度	課長：東海樹一、課長補佐：上田和弘、学芸員：河竹明子、大高崎泰明
- 7 調査は、林、河竹、大高崎が担当した。
- 8 本書の執筆・編集は河竹、大高崎が担当した。また遺物の尖削、トレースは河竹を中心となり、後述する整理補助員、整理作業員が行った。
- 9 調査・報告書作成に当たっては、大野究、廣瀬尚樹（氷見市教育委員会生涯学習課学芸員）が補佐をした。
- 10 グリッド杭の設置、遺構図の空中写真測量は日本海航測株式会社、パシフィックコンサルタンツ株式会社に委託した。また、平成16年度調査で出土した石製品については平成17年10月パリノ・サー・ヴェイ（株）に石材鑑定を委託し、12月に分析報告を受け、完了した。
- 11 第1図に掲載の2万5千分1地形図は、国土地理院長の承認を得て複製したものである。
(承認番号 平17 北複、第263号)
- 12 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習課が保管している。なお、粟原A遺跡の略号は「AWA」とした。
- 13 土層の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準十色軸」に準じている。
- 14 調査参加者は次のとおりである。

平成15年度発掘調査業務	発掘調査・遺物整理補助員：垣内勇一・宮崎美知子
平成16年度発掘調査業務	発掘調査・遺物整理補助員：大江智志・宮崎美知子
平成17年度報告書作成業務	整理作業員：大江智志・村中理栄
- 15 発掘作業員は氷見市シルバー人材センターに委託した。
- 16 調査、本書作成にあたり、下記の方々、機関から多大なご教示、ご協力を得た。記して感謝申し上げる。
国土交通省北陸地方整備局・富山県文化財課・富山県埋蔵文化財センター・財團法人富山県文化振興財團・
水見市能越自動車道対策室・氷見市立博物館・氷見市史編さん室・酒井重洋・山本正敏・宮田進一（敬称略）

目 次

第1章：遺跡の環境	1
第1節：遺跡の地理的環境	1
第2節：遺跡の歴史的環境	1
第2章：調査の概要	4
第1節：発掘調査に至る経緯	4
第2節：本調査の経過	4
第3節：座標軸の設定	4
第3章：調査の成果	6
第1節：試掘調査の概要	6
第2節：本調査の概要	7
(1) 平成15年度調査区	
(2) 平成16年度調査区	
第3節：遺物	9
(1) 平成15年度調査区出土遺物	
(2) 平成16年度調査区出土遺物	
(3) 試掘調査出土遺物	
第4章：まとめ	14
参考文献	15
自然科学分析	16
報告書抄録	

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	3
-----------	---

図 目 次

第1図 周辺の遺跡	2
第2図 調査区及びグリッド配置図	5
第3図 試掘トレンチ位置図	6
第4図 平成15年度調査区 造構配図	17
第5図 平成15年度調査区 SX01遺物出土状況図・七層断面図	18
第6図 平成15年度調査区 北西壁・南西壁・層断面図	19
第7図 平成16年度調査区 全体図	20
第8図 平成16年度調査区 トレンチ十層断面図・SP11・12平・断面図	21
第9図 平成16年度調査区 東西・南北トレンチ上層断面図	23
第10図 平成16年度調査区 丘陵斜面調査前測量図	25

第11図 遺物実測図（1）	26
第12図 遺物実測図（2）	27
第13図 遺物実測図（3）	28
第14図 遺物実測図（4）	29
第15図 遺物実測図（5）	30
第16図 遺物実測図（6）	31
第17図 遺物実測図（7）	32

写真図版目次

図版 1 遺跡周辺空中写真（1947年撮影）	4. T12完掘状況
図版 2 遺跡周辺空中写真（1975年撮影）	5. T13完掘状況
図版 3 1. 平成16年度調査前遠景 2. 平成15年度調査前近景	6. T14完掘状況 7. T15完掘状況
図版 4 1. 平成16年度調査後遠景 2. 平成16年度調査後鳥瞰風景 3. 平成15年度調査区全景	8. T16完掘状況 図版 9 平成16年度調査区（2） 1. 東西1トレンチ 北壁西端 2. 東西2トレンチ 北壁中央 3. 東西3トレンチ 北壁東端 4. 南北トレンチ 西壁中央 5. SP11・12検出状況 6. SP11・12完掘状況 7. 作業風景 8. 作業風景
図版 5 平成15年度調査区（1） 1. 北西壁中央 2. 北西壁（T1） 3. 南西壁北西端 4. SX01 検出状況 5. SX01 完掘状況 6. SX01 遺物出土状況 7. SX01 b-b'土層断面	図版10 遺物写真（1）
図版 6 平成15年度調査区（2） 1. 旧河道02完掘状況 2. 南西壁（旧河道02土層断面） 3. IH河道02底盤上 遺物出土状況 4. IH河道03完掘状況 5. IH河道03土層断面 6. 旧河道03底盤上 遺物出土状況 7. 墨書き器（144）出土状況 8. 作業風景	図版11 遺物写真（2） 図版12 遺物写真（3） 図版13 遺物写真（4） 図版14 遺物写真（5） 図版15 遺物写真（6） 図版16 遺物写真（7）
図版 7 1. 平成16年度調査前現況 2. 平成16年度調査区全景	
図版 8 平成16年度調査区（1） 1. 中央部縦斜面 2. 中央部縦斜面 3. T11完掘状況	

第1章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230 km²、人口は約5万6千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高300~500mの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。市北半部は小河川とその支流からなる谷地形であり、まとまった平野が少ない。市南半部は、主として布勢水海が堆積してきた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる。

栗原地区は平野の西端、丘陵と平野が入り組んだ地形である「一谷平野」に位置する。現況は田地・畠地・山林である。

栗原A遺跡は、仏生寺川支流である万尾川上流左岸、宝達丘陵から派出した小丘陵の斜面から裾部にかけて立地し、標高約4~35mに位置する。万尾川は、万尾で中谷内川と合流し、「一町湯」を経て富山湾に注ぐ小河川である。

第2節 遺跡の歴史的環境

以下、仏生寺川・万尾川・中谷内川流域の遺跡について概観する。

縄文時代の遺跡では、万尾川右岸に上久津呂ゴタンダ山遺跡、上久津呂B遺跡がある。本調査の行われた上久津呂中層遺跡では、多量の縄文土器の他に、人骨・動物・魚類の骨、貝類などが出土している。

弥生時代の遺跡として、上久津呂B遺跡、万尾B遺跡がある。弥生時代後期の遺跡として上久津呂中屋遺跡があり、建物跡などが確認されている。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡として、中谷内川左岸の丘陵東麓に万尾遺跡がある。いずれも丘陵縁辺部に営まれた遺跡である。

古墳時代には、布勢水海西側周辺部の丘陵上に古墳が築かれた。弥生時代終末期~古墳時代初頭にかけての方墳である下久津呂古墳、丘尾切断の円墳である布施円山古墳、前方後方墳である万尾古墳、8基の円墳と1基の方墳からなる深原古墳群がある。いずれも平野に向かって舌状にのびる丘陵の先端部に位置する。布施畠遺跡では5世紀後半の遺物が出土している。本調査の行われた中谷内遺跡では集落跡が確認されている。

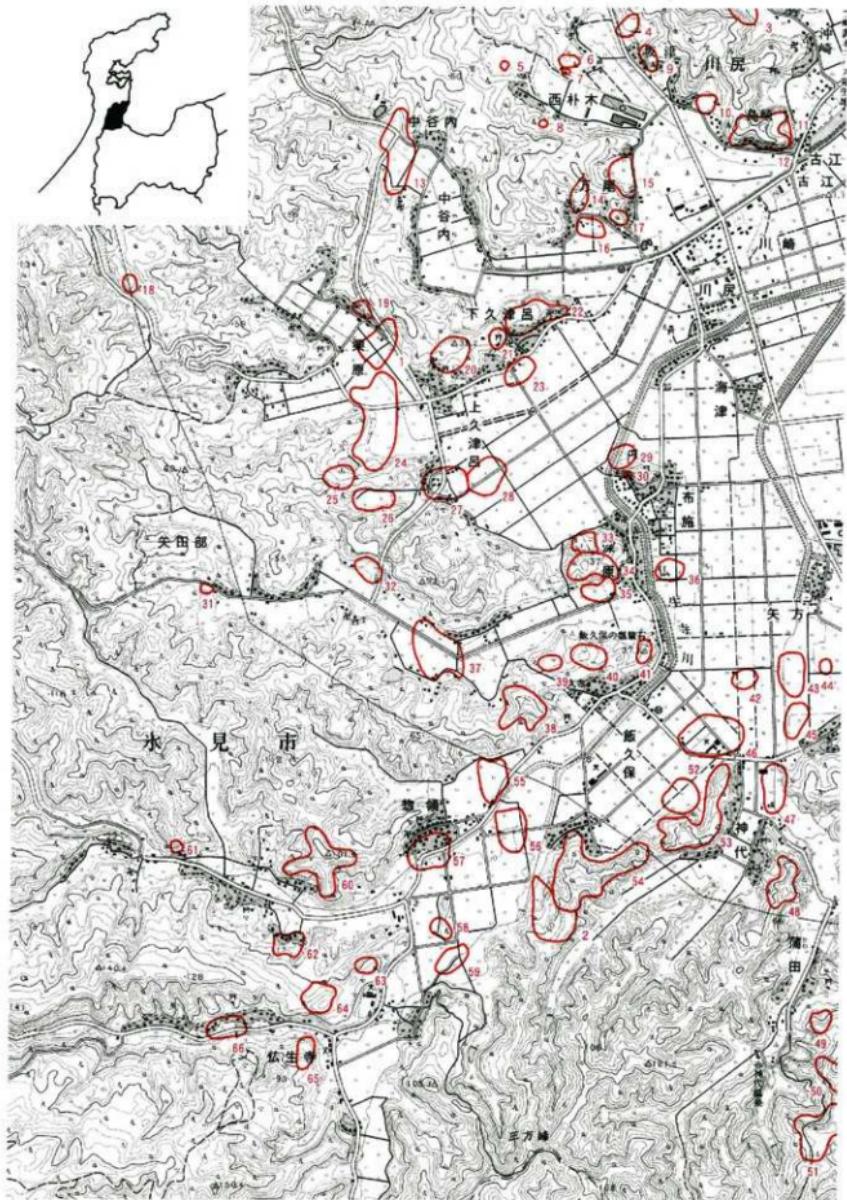
古代の遺跡では、奈良時代の土鍤が出土している万尾遺跡、7世紀後半から8世紀中ごろとみられる上久津呂A遺跡、8世紀から9世紀とみられる深原前田遺跡がある。

中世の遺跡では、久津呂城跡、平坦面・空堀・土塁が確認されている万尾城跡、珠洲焼の壺が出土している上久津呂C遺跡がある。上久津呂中屋遺跡、中谷内遺跡では集落跡が確認されている。

また、近くには、県指定文化財天然記念物の胸つなぎ桜がある。「越中国守大伴家持がたびたび馬をつなぎ船に乗り換えた」、「この土地の名「湊」が示すように、布勢水海がこの地まで続いていて、船着場であった」といった伝承がある。

布施円山古墳のある布勢の円山は、市指定文化財名勝となっており、「布勢水海の孤島で、万葉の歌人が遊覧した。」という伝承がある。

※上久津呂中屋遺跡、中谷内遺跡の本調査は、文化振興財團が行った。



第1図 周辺の遺跡 (S = 1 / 25,000)

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	栗原A遺跡	散石地	古代・中世・近世	34	横原山遺跡	古墳	古墳
2	正保寺遺跡	古墳・散布地	縄文・弥生・古代・中世・近世	35	深見山遺跡	散石地	古代
3	丸栄B遺跡	散布地	縄文・中世	36	弓削城跡遺跡	散布地	古墳
4	坂津遺跡	散布地	古代	37	小山17遺跡	散布地	縄文・古墳・古墳・古代・中世・近世
5	西村木ジハコウジ遺跡	散布地	古代・中世・近世	38	惣領戸山遺跡	城跡?	中世
6	ロット木吉塙跡	古墳	古墳	39	天王諸子カタ遺跡	散布地	中世
7	西村木フルヤチ遺跡	その他(埋納鏡)	中世	40	飯久保佐山遺跡	散布地・塚	縄文・弥生・近世
8	西村木シガヤチ遺跡	墓	中世	41	寺坂久保古墳群	古墳	古墳
9	坂津横穴墓群	横穴墓	古墳	42	寺代ハタケダ遺跡	散布地	中世
10	坂津B遺跡	散布地	弥生	43	仲代羽須遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
11	十二阿敷の遺跡	散布地	弥生	44	惣領モリノ田跡	塚	中世
12	施財城跡	城跡	中世	45	石崎若狭	散布地	古代・中世
13	伊内遺跡	散布地・集落	縄文・古墳・古代・中世	46	坂久保ナガシ遺跡	散布地	古代
14	方尾城跡	城跡	中世	47	矢ノ川一丁目遺跡	散布地	弥生・古墳
15	万尾遺跡	散布地	弥生・古墳・古代・中世・近世	48	仲代城跡	城跡	中世
16	万尾B遺跡	散布地	弥生・古墳・古代・中世・近世	49	柴田遺跡	散布地	中世
17	万尾古墳	古墳	古墳	50	塙二之井洋遺跡	不明	中世
18	栗原ミヤ子遺跡	散布地	古墳	51	高田A遺跡	不明	中世
19	栗原B遺跡	散布地	不明	52	坂久保江ノノ遺跡	散布地	古代・中世
20	上久伊古C遺跡	半世塚	中世	53	光芦寺山古墳群	古墳	古墳
21	下久津呂古遺跡	古墳	古墳	54	坂久保城跡	城跡	中世
22	久津呂遺跡	城跡	中世	55	惣領前田城跡	散布地・集落	縄文・弥生・古墳・中世・近世
23	下久津呂遺跡	散布地	中世	56	惣領野瀬遺跡	散布地	縄文・古墳・古代・中世
24	上久治古中國遺跡	生落・散布地	縄文・弥生・古墳・古代・中世	57	惣領虎跡	散布地	古墳・古代・中世・近世
25	上久津呂イシグン山遺跡	散布地	縄文・古墳	58	惣領古塙群	古墳	古墳
26	NHJ 18遺跡	散布地	縄文・古代・中世・近世	59	惣領山遺跡	散布地	古墳～古代
27	上久伊古山遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・古代	60	惣領岩跡	城跡	中世
28	上久津呂A遺跡	散布地	古墳	61	惣領岩屋遺跡	古墳	中世
29	右庵ハッカ遺跡	散布地	縄文・古代	62	接骨オヤノヤチ遺跡	散布地	古代・近世
30	右庵円山古墳	古墳	古墳	63	惣領コツヂラ古墳群	古墳	古墳
31	矢玉郡カワヘ少遺跡	散布地	中世	64	惣領コツヂラ城跡	城跡	中世
32	矢田前大坪洋遺跡	散布地	中世	65	宇川川根城跡	城跡	中世
33	赤原前山遺跡	散布地	古代・中世・近世	66	丹生東遺跡	散布地	中世

第2章 調査の概要

第1節 発掘調査に至る経緯

能越自動車道（一般国道470号）は、富山県西部・能登地域の高速交通体系の確立及び地域活性化のため、昭和62年の高規格幹線道路計画の一環として、石川県輪島市から富山県砺波市に至る延長約100kmの自動車専用道路として計画された。

氷見市内においては、平成12年3月に高岡IC～氷見IC間の分布調査が、富山県教育委員会を主体として実施された。T字予定ルート上には、周知の埋蔵文化財包蔵地として栗原A遺跡があったが、この分布調査により範囲が拡大することが確認された。

これを受けて平成14年6月25日～6月28日に、富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所によって栗原A遺跡の試掘調査が実施され、約3,100m²について本調査が必要であると判断された（富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所2003）。

国土交通省・富山県教育委員会・富山県文化振興財團・氷見市教育委員会の協議により、能越自動車道本線の埋蔵文化財発掘調査については、富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所が担当することになっていたが、平成15・16年度については、本調査が必要な面積が財團事務所の調査体制の限界を超えているため、氷見市教育委員会に一部の本調査について協力要請があった。

これを受けて氷見市教育委員会では、正保寺遺跡と栗原A遺跡の二箇所について、平成15・16年度に調査を行うことになった。

また、富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所が、上久津呂中屋遺跡の水田部分の試掘調査を行った所、遺物が出上したので、万尾川対岸の本遺跡においても万尾川に近い部分まで対象地を広げて試掘調査を行うこととなった。

第2節 本調査の経過

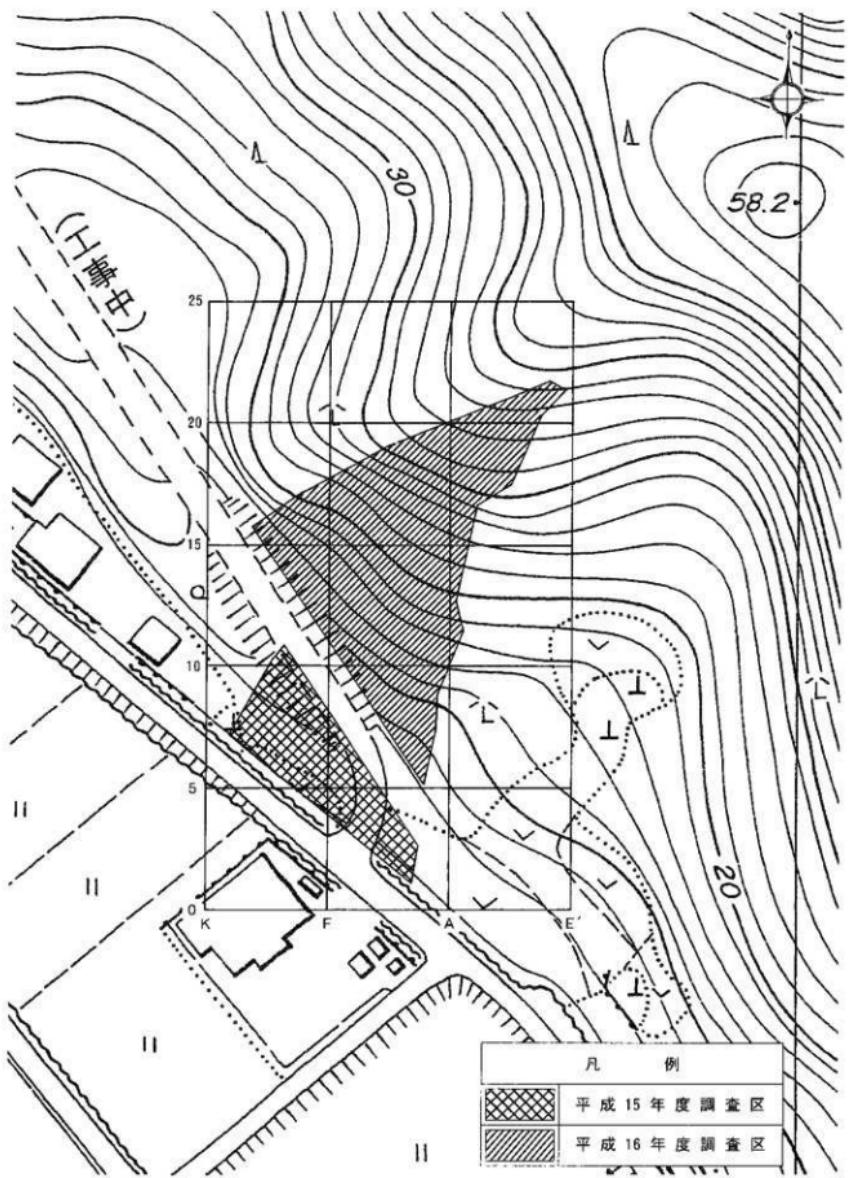
調査にあたっては、調査区を2分割して、平成15年度に丘陵部の調査を実施し、平成16年度に丘陵斜面の調査を実施した。

平成15年度調査は、6月12日より発掘作業員による作業・掘削を開始した。6月27日南西側斜面において重機による表土掘削を実施した。以後は人力による掘削を続けた。8月2日にラジコンヘリによる空中写真的撮影を実施した。深掘り、図化作業等を終え、20日に調査を終了した。その後器材の撤収、埋め戻しを行い、すべての作業を終了した。

平成16年度調査は、9月6日から発掘作業員による作業を実施した。13日にラジコンヘリによる現況地形測量の空中写真的撮影を実施した。その後人力による掘削を続けた。12月10日にラジコンヘリによる空中写真的撮影を実施した。図化作業等を終え14日に調査を終了した。その後器材の撤収を行い、すべての作業を終了した。

第3節 座標軸の設定（第2図）

表土除去作業の終了後、国土座標（座標系第Ⅳ区）上の点（X=91,920、Y=-19,840）を基準として設定した。1グリッドの区画は5m×5mを1単位とし、その南東隅のグリッド交点を呼称することとした。さらに、そのグリッドを4分割した区画を設定し、最小区画として遺物取り上げ時に利用した。



第2図 調査区及びグリッド配置図 ($S = 1/1,000$)

第3章 調査の成果

第1節 試掘調査の概要（第3図）

平成15年5月29日から6月2日にかけて行った。対象面積は約8,000m²、調査面積は289m²である。重機による掘削を行い、人力で土層断面の検出を行った。調査の結果、調査区全体が湿地帯で、遺構は確認できなかった。そのため本発掘調査の必要はないと判断した。

基本層序は上から、黄灰色粘質土、にぶい黄橙色粘質土、暗青灰色粘質土、黒褐色粘質土の順にはば水平に堆積している。黒褐色粘質土には多量の有機物が含まれており、湿地帯が広がっていたと考えられる。遺物は黒褐色粘質土層中には認められず、主に暗青灰色粘質土層から出土している。

- T 1 幅1.5m、長さ9.8mのトレンチである。遺物は土師質土器、須恵器、越中瀬戸焼が出土している。
- T 2 幅1.5m、長さ60mのトレンチである。遺物は古代土師器、須恵器、中世土師器、中世珠洲焼、古瀬戸、唐津焼が出土している。基本層序の一部に灰色砂質土が堆積している。
- T 3 幅1.5m、長さ33mのトレンチである。遺物は土師質土器が出土している。基本層序の一部に暗灰色粘質土が堆積している。
- T 4 幅1.5m、長さ16.3mのトレンチである。遺物は出土していない。
- T 5 幅1.5m、長さ18mのトレンチである。遺物は土師質土器、須恵器、中世土師器が出土している。
- T 6 幅1.5m、長さ38mのトレンチである。遺物は土師質土器、中世珠洲焼が出土している。
- T 7 幅1.5m、長さ18mのトレンチである。遺物は土師質土器が出土している。



第3図 試掘トレンチ位置図 (S = 1/2,500)

第2節 本調査の概要

(1) 平成15年度調査区（第4～6図、図版4～6）

基本層序は、表土、遺物包含層（灰黄褐色粘質土など）、地山（灰オリーブ色粘質土）となる。遺構は、旧河道・土坑等を検出した。

古代の遺構

SX01（第5図） D3に位置する。平面形は不定形で、遺構の性格は不明である。南西側は調査区外で切られているため不明であるが、方形であった可能性がある。南北最大3m、東西最大3m、深さ28cmを測る。北側の溝状の部分は別の遺構の可能性がある。覆土は黄灰色、暗灰黄色砂質土に明黄褐色粘質土ブロック状混、灰色細砂ににぶい黄橙色細砂混などである。上部は後世のスラグによる搅乱を受けている。遺物はまとまって出土しており、須恵器、土師器、製塩土器の棒状脚などが出土しており、8世紀後半～9世紀前半と比定される。

中・近世以降の遺構（第4・6図）

旧河道01 調査区の西端に位置している。覆土は、にぶい黄褐色、黄灰色、黒褐色、黒色粘質土、青灰色粘土である。遺物は現代の陶磁器が出上している。調査区の南西側を流れる用水路は、これを改修したものと思われる。

旧河道02 調査区南西中央に位置し、斜面に対して直交する溝である。丘陵裾から調査区端までで長さ約7.0m、最大幅約5.5m、深さ約40cmを測る。覆土は、灰黄色、黄灰色、褐灰色、黒褐色粘質土に明褐色、明黄褐色粘質土混である。山からの流水によって形成されたのであろうか。遺物は須恵器、土師器、近世陶磁器が出土している。

旧河道03 調査区南東に位置し、斜面に対して直交する溝である。丘陵裾から調査区端までで長さ約6.5m、最大幅約2.5m、深さ約80cmを測る。覆土は、黄灰色粘質土、オリーブ灰色砂である。山からの流水によって形成されたのであろうか。遺物は須恵器、土師器、中世珠洲焼が出土している。

SD01 旧河道03上に重なる、後世の溝である。遺物は須恵器、土師器、中世珠洲焼、現代陶磁器が出土している。

SK02 調査区南東に位置する。平面形は不定形で、遺構の性格は不明である。覆土は黄灰色粘質土である。遺物は出土していない。

(2) 平成16年度調査区（第7～10図、図版7～9）

調査区全体は丘陵からの流土が何層にも自然堆積しており、堆積は複雑で一様ではないため、基本層序を大きく分けて、1層：表土、2層：にぶい黄褐色粘質土、3層：暗褐色～黒褐色粘質土、4層：にぶい黄褐色粘質土粘性強、5層：2層と6層の漸移層、6層：灰オリーブ色粘質土、7層：木の根などの影響を受けた層とし、混じりの割合が違うため、トレンチごとに「a、b、c…」というようにそれぞれの層を細かく分けた。これは土層断面図と一致する。4層以下からは遺物は認められなかった。

遺構は小穴が2基確認されたが、おそらく近世以降のものであろう。また、土地利用の変遷確認のために設定したトレンチについても記述した。

SP11・SP12 (第8図、図版9) 15Bに位置する。円形を呈し、直径は約25cm、深さ約20cmを測る。覆土はSP11が黒褐色粘質シルトに地山粒状混、SP12がにぶい黄褐色粘質土に黑色粘質土と地山粒状混である。遺物は小穴からは出土していないが、2層からは比較的出土した。

トレンチ (第8図、図版8)

平坦面の堆積の広がりと、傾斜と流土との関係を確認するために、トレンチを設定した。

T11 斜面に平行するように設定した幅1m、長さ11.0mのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅1m、長さ2.8mと3.5mのトレンチである。暗褐色から黒褐色などの粘質土が全体に堆積している。2層も整地の際に削平を受けている。トレンチ中央辺りに黒褐色粘質上層が落ち込む部分があるが、自然地形である。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は出土していない。

T12 斜面に平行するように設定した幅50cm、長さ3.6mのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅50cm、長さ1.9mのトレンチである。暗褐色から黒褐色などの粘質土ではなく、2層の下は灰オリーブ色粘質土層であった。黒褐色粘質上層は後世に削平されたのであろうか。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は出土していない。

T13 斜面に平行するように設定した幅1m、長さ10.1mのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅1m、長さ2.6mのトレンチである。暗褐色から黒褐色などの粘質土ではなく、2層の下は灰オリーブ色粘質上層であった。黒褐色粘質土層は後世に削平されたのであろうか。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は明治時代の播鉢片が出土している。

T14 平坦面に設定した幅1m、長さ9.0mのトレンチである。表土を掘削すると、すぐに灰オリーブ色粘質土層と搅乱層であった。これは、農道中谷内・惣領線建設時の法面工事の際に大きく造成されたためである。遺物は出土していない。

T15 斜面に平行するように設定した幅1m、長さ3.4mのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅70cm、長さ6.7mのトレンチである。暗褐色から黒褐色などの粘質土ではなく、にぶい黄褐色粘質土のみであった。2層も後世の整地の際に削平を受けている。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は出土していない。

T16 斜面に平行するように設定した幅1m、長さ4.4mのトレンチと、斜面に直交するように設定した幅1m、長さ3.0mのトレンチである。T15と同様に、暗褐色から黒褐色などの粘質土ではなく、にぶい黄褐色粘質土のみであった。自然堆積しているのみで、遺構は確認されなかった。遺物は須恵器、土師器細片、肥前系磁器破片が出土している。

12C南西壁 12Cの北西部には暗褐色から黒褐色粘質土が落ち込む所があった。東西3トレンチの西端にも落ち込む所があり、この部分を水が流れていた可能性がある。南北トレンチ中央付近にも黒褐色粘質土が落ち込む所があるが、関連は不明である。また、平成15年度調査区の旧河道02に繋がる可能性は否定できない。遺物は出土していない。

中央部緩斜面 (第9図、図版9)

堆積の広がりを確認するために、斜面に平行するように東西トレンチを3箇所設定した。また、傾斜と流土を確認するために、斜面に直交するように南北トレンチを1箇所設定した。

東西1トレンチ グリッド16に沿って幅50cm、長さ約23.0mのトレンチを設定した。

6層は16A付近を最高に16Bから16Cにかけて下がり、16D付近で上がる。4層が認められない部分は2層堆積前に削平を受けている可能性がある。3層は4層上の一部に堆積しており、III表十とみられ

るとみられる。3bは小穴であろうか。なお、16Bから16Cにかけての谷部分では4層が厚く堆積している中に、黒褐色や灰黄褐色粘質土が斑状に混じる部分があるが、木の根か流水の影響によるもので、造構ではないと考えられる。この部分では3層が認められないため、2層堆積前に削平された可能性がある。2層は山部分では薄く、谷部分では厚く堆積している。2層の薄い所は現代の整地の際に削平を受けている可能性がある。遺物は土師器細片が出土している。

東西2トレンチ グリッド15に沿って幅50cm、長さ約22.0mのトレンチを設定した。

6層は15A付近を最高に西に下がるが、上層の影響を受け15D付近まで不安定である。4層は15Cから15Dにかけては安定しているが、15Aから15Cにかけては複雑な堆積状況であり、層序は不明確である。3層は15Bから15Cにかけて堆積している。旧表土とみられる。3g・3h・3cは小穴であろうか。15A付近、15Cから15Dにかけては3層が認められないため、2層堆積前に削平された可能性がある。なお、15Aから15Bの中間に黒褐色粘質土が混じる部分があるが、木の根か流水の影響によるもので、造構ではないと思われる。2層は山部分では薄く15Aから15D付近はほぼ均質に堆積しているが、谷部分の15D西では厚く堆積している。2層の薄い所は現代の整地の際に削平を受けている可能性がある。遺物は土師器細片が出土している。

東西3トレンチ グリッド13に沿って幅50cm、長さ約19.0mのトレンチを設定した。

13C西側は掘削直後に半分ほど崩落してしまい、様子が窺えなかった。

6層は13A西側付近を最高に13B付近から下がり、13C付近でやや水準になり、13C西で急激に下がる。4層は6層に沿うように堆積しているが、13A西側は2層堆積前に削平を受けている可能性がある。3層は13Bと13Cの中間、13Cの西側で確認できた。旧表土とみられる。認められない所は削平を受けている可能性がある。2層は13A付近では薄く、13C西側では厚く堆積している。13A付近は現代の整地の際に削平を受けている可能性がある。にぶい黄褐色ではなく、褐色粘質土の堆積である。遺物は出土していない。

南北トレンチ グリッドCに沿って幅50cm、長さ約29.0mのトレンチを設定した。

6層は全体的に不安定に堆積しており、それを埋めるように4層が堆積している。15C付近から14Cにかけては6層まで掘削しなかった。4層が認められない16C北側と11C北側の部分は、2層堆積前に削平を受けている可能性がある。3層は15C北側から13Cに堆積しており、旧表土とみられる。15C付近は3層がほぼ水準に堆積しており、上部は2層堆積前に削平を受けている可能性がある。16C南側、北側、11Cから13Cにかけても同様に削平を受けている可能性がある。14Cと15Cの中間に黒褐色粘質土が落ち込む部分がある。13C北側にも落ち込む部分があるが、上部が削平されている可能性がある。3aは小穴であろうか。2層は14Cから15Cにかけては現代の耕作・整地の際に削平を受けている可能性がある。11Cから12Cと13Cの中間にかけては、にぶい黄褐色ではなく、褐色粘質土の堆積である。遺物は土師器細片が出土している。

第3節 遺物

試掘調査における出土遺物はコンテナで2箱、本調査における出土遺物は約30箱である。

中世珠洲焼は吉岡麻暢氏の7期編年（吉岡1994）に準拠した。

(1) 平成15年度調査区出土遺物

SX01出土遺物（第11～14図）

1～68は古代須恵器。1～14は杯蓋である。1は頂部と口縁部との境に稜があり、端部の屈曲が強く、内傾する。2・3は頂部から口縁部へスムーズに下がる。端部をスムーズに折り曲げ、断面は三角形を呈する。4は口縁端部が短く屈曲し、断面は三角形を呈する。5は頂部と口縁部との境に稜があり、端部をスムーズに折り曲げ、断面は三角形を呈する。5・6は内側に稜があり、口縁端部を引き出す。7は転用鏡である。7・8は頂部と口縁部との境に稜がある。7～9は内側に稜があり、口縁端部を引き出す。縁部は内傾し、断面は一角形を呈する。10は頂部と口縁部との境に稜がある。10・11は内側に稜があり、口縁端部を引き出す。断面は四角形を呈する。12～14は頂部から口縁部へスムーズに下がり、端部は屈曲しない。13は内面に「東人」と墨書きされている。14は外面頂部に3条の沈線が施されており、仏教の影響を受けているものである。焼成時に酸化しており、にぶい赤褐色を呈する。

15～40は杯Aである。15・16は底部と体部の境が丸い。17～25は底部と体部の境が中間のものである。17・19は底部は中心に向かってやや上がる。18・20～25は底部は平らである。26～29は底部と体部の境が明瞭で角張る。9世紀の様相を呈する。27は底部に墨書きされているが、判読できない。「千」か「区」であろうか。28は口径は14cmであり、やや大型のものであろうか。30～33は体部が外に大きく傾いて立ち上がる。30は底部と体部の境が丸い。34～40は底部のみである。40はやや大型のものであろうか。24・30・39は焼成は不良で軟質灰白色、36は酸化しており、褐灰色を呈する。

41～55は杯Bである。41～45は体部が直線的に立ち上がる。41は転用鏡で、底部に墨跡が残る。44・45は底部と体部の境が角張る。46～49は体部の立ち上がる角度が途中で変わり外傾する。器軸は底部が厚く、体部は薄い。46は口径が9.8cmと小型である。50・51は底部のみである。50は高台が細く、51は高台が太い。52・53は口径が14cm前後で大型のものである。52は口縁部がやや外傾している。53は体部が上方に立ち上がるため、高台が細い。底部に墨書きされている。「子」であろうか。54・55は底部のみであるが大型のものであろうか。56は杯であるが、体部外面に1条の沈線が施されており、仏教の影響を受けているものである。焼成は不良で軟質、54・56は浅黄褐色、55は灰白色を呈する。

57～60は横瓶である。57・58は体部破片である。外面上に平行叩き痕、内面に同心円状當て具痕が残る。58は内面の一部にヨコナデが認められ、口頭部接合付近であろうか。外面上に降灰が認められる。59・60は胴部側面を閉塞する円盤である。外面上はカキメ調整である。59は焼きぶくれがあり、外面上に自然釉がかかる。61～63は壺壺類の口縁部である。61は大壺で口径は12.5cmを測る。外面上は青灰色を呈する。63は外面上に降灰が認められオリーブ黒色を呈する。64～68は体部破片である。64・65は胴上部である。いずれも外面上に平行叩き痕、内面に同心円状當て具痕が残る。68は掘り込みに対して木口が斜行する叩き具を用いる。

69～84は古代土師器。69は楕か鉢口縁部破片である。70・71は小型壺口縁部であろうか。70は内面にハケ目が認められる。72・73は小型壺口縁部である。くの字状に屈曲し、端部を丸くおさめる。74は小型壺底部であろうか。内外面ナデ調整である。75・76は壺口縁部破片である。75は端部は方形を呈し、上端部は引き上げられる。76は端部を丸く收める。内面にハケ目、外面上に煤の付着が認められる。77は壺か鍋胴部である。内外面剥落しており器壁は薄いが、外面上にはハケ目、煤の付着が認められる。78は壺か製塙土器胴部であろうか。胎土は砂粒、海綿骨針を多く含み、焼成は不良で明赤褐色を呈する。内面上にハケ目、外面上に指削汙痕が認められる。79～81は鍋口縁部であろうか。79は端部を外側に折り曲げ、

丸く取める。内面にハケ口が認められる。80は端部を外側に折り曲げ、丸く取める。81は端部は外側に屈曲し、丸く取められる。外面に輪積み痕が、内面に被熱痕が認められる。82~84は不明底部である。いずれも橙色を呈する。

85~89は棒状尖底製塙土器棒状脚。85・87は太いタイプで、85は左まわりにひねり成形されている。塙が残っているのか、付着物が認められる。86は右まわりにひねり成形されており、内面に絞り痕が認められる。比較的焼成が良く締まっている。87はナデ調整を施す。88はくびれ部に右まわりにひねり成形された跡が認められる。89は指圧痕が認められる。いずれも胎土は砂粒、海綿骨針を多く含み、外面は橙色を呈する。

SD01出土遺物（第14図）

90は須恵器瓶頸肩部であろうか。上部に降灰が認められる。

91は中世珠洲焼鉢口縁部破片。口縁端部は方頭を呈し外傾する。胎土は海綿骨針を含む。IV期（1280年代～1370年代）のものと考えられる。

旧河道02出土遺物（第15図）

92~122は古代須恵器。92は杯蓋である。頂部と口縁部との境に稜があり、端部の屈曲が強い。93~97は杯Aである。93・94は底部と体部の境が中間のものである。95~97は底部と体部の境が明瞭で角張る。95は体部が外に大きく傾いて立ち上がる。96は器底は底部が厚く、体部は薄い。97は体部が外に大きく傾いて立ち上がるであろうか。98~105は杯Bである。98・99は体部が上方に向に立ち上がる。100・101は体部が斜方向に立ち上がる。102・103は底部と体部の境が角張る。104・105は底部のみであるがやや大型のものである。106は大型の杯体部である。107は横瓶体部破片である。外面はカキメ調整である。108は瓶頸肩部であろうか。外面はカキメ調整である。109・110は瓶頸底部である。109は高台を有する。ロクロ回転は時計まわりで、底部回転糸切り後、高台を貼付け、ナデで整えている。110は体部は底部から直線的に立ち上がる。111は壺口頭部である。外面に平行叩き痕、内面に特殊な当て具痕（扇状の放射状文か）が残る。112は壺胴部である。外面に格子状叩き痕、内面に同心円状当て具痕が残る。

113~115は古代土師器。113は椀であろうか。内面に段が認められる。調整はヨコナデである。胎土はわずかに海綿骨針を含む。114は小型壺口縁部破片である。くの字状に屈曲し、端部を丸く取める。115は壺口縁部破片である。くの字状に屈曲し、端部は方形を呈する。116は棒状尖底製塙土器棒状脚である。やや太いタイプで、指圧痕が残る。胎土に海綿骨針を含み、外面は橙色を呈する。

117は越中瀬戸焼壺頸破片。17~18世紀のものと考えられる。

118は肥前系磁器破片。口縁部内外面に一重圓線が巡り、内面には文様が認められる。18世紀のものと考えられる。

119は唐津焼盤であろうか。内面にオリーブ灰色の釉がかかり、胎土目が残る。17世紀前半のものと考えられる。

旧河道03出土遺物（第15・16図）

120~130は古代須恵器。120・121は蓋である。120は頂部と口縁部との境に稜があり、口縁端部を引き出す。121は天井部が厚く、大型のものであろうか。122は杯Aである。底部と体部の境が明瞭で角張る。123~126は杯Bである。123は直線的に上方に立ち上がる。124は体部がやや外に傾いて立ち上がる。125は焼成は不良で軟質、灰白色を呈する。126は高台がついていた跡が残る。127は瓶頸肩部である。

外面に2条の沈線が施されている。128は瓶頸底部である。高台がついていた跡が残る。129・130は体部破片である。129は外面に降灰が認められる。130は外面は叩き後カキメ調整を施す。

131～133は古代土師器碗であろうか。131は胎土はわずかに海綿骨針を含み、浅黄橙色を呈する。132・133は調整は内外面横ナデで、橙色を呈する。中世土師器皿であるかもしれない。134は古代土師器口縁部であろうか。135は棒状尖底製塙土器棒状脚である。やや太いタイプで、ナデ調整を施す。胎土は砂粒を含み、外面は橙色を呈する。

136は中世土師器皿。調整はヨコナデである。胎土は密、焼成は良好で堅緻に焼締められており、橙色を呈する。14世紀のものと考えられる。

137は中世珠洲焼鉢。鉢目は2.3cm幅に7条の原体を用いる。胎土は砂粒を少量含み、焼成はやや良好である。

トレンチ出土遺物（第16図）

138は越中瀬戸焼底部。底部に糸切り痕が残る。18世紀のものと考えられる。

139は肥前系磁器碗か鉢であろうか。口縁部は外反りで、内外面幾何学文様で区画した中に草花文を入れる。黒牛田新窯に同様の文様が見られる。19世紀のものと考えられる。

スラグ搅乱範囲出土遺物（第16図）

140は古代須恵器蓋。頂部と口縁部との境に稜があり、口縁端部を引き出し、短く折り曲げる。

141は土師器鉢底部であろうか。外面に高台がついていた跡が見られる。内面はハケ調整である。

142は肥前系磁器碗。口縁部は外面に一重、内面に二重圓線が巡る。18世紀のものと考えられる。

包含層出土遺物（第16図）

143～149は古代須恵器。143は蓋である。頂部と口縁部との境に稜があり、口縁端部を引き出し、短く折り曲げる。144～146は杯Aである。144は外面底部に墨書きされている。判読できないが「用」であろうか。焼成はやや不良で灰白色を呈する。145・146は底部破片である。145は褐灰色を呈する。147・148は杯Bである。148は大型のものであろうか。149は長頭瓶頸部である。外面に1条の沈線が施されている。

150～154は古代土師器。150・151は碗口縁部である。150は胎土に海綿骨針を含む。151は口縁端部は外反ぎみである。いずれも橙色を呈する。9～10世紀のものと考えられる。153は小型壺口縁部である。焼成は不良で灰白色を呈する。154は壺口縁部である。強い横ナデを施す。胎土は砂粒を多く含む。152・155は器種は不明であるが土師器口縁部破片である。

156は白磁小杯底部であろうか。内外面に釉がかかり灰白色を呈する。15世紀のものと考えられる。

157は志野焼底部であろうか。

158は越中瀬戸焼底部破片。底部に糸切り痕が残る。外面灰色を呈する。

159・160は唐津焼底部。いずれも外面体部及び底部高台は無釉である。159は瓶か小碗であろうか。内面は緑色釉を施す。内面に2ヶ所胎土目跡が残る。17世紀のものと考えられる。160は皿であろうか。内面は灰釉を施す。19世紀のものと考えられる。

161～167は肥前系磁器。161～163は碗である。161は内面に一重圓線が認められる。162は外面二重格子文であろうか。163は内面に緑灰色の文様がある。164は皿口縁部である。内面は雪輪草花文であろうか。165・166は碗である。165は見込みに蛇の目釉刺ぎ、一重圓線が認められる。166は見込みに文字らしき文様が認められる。167は角鉢で八角形を呈する。内面は草文であろうか。161～164は18世紀、165

～167は19世紀のものと考えられる。

(2) 平成16年度調査区出土遺物（第17図）

中央部縁斜面の2層から出土した遺物が多い。

168は弥生上器壺口縁部であろうか。調整は内外面ハケ目、外画にキザミを施す。

169～172は古代須恵器。169は蓋である。頂部と口縁部との境に稜があり、口縁端部を引き出し、矧く折り曲げる。170は杯Aである。底部と体部の境が明瞭である。底部に向転ヘラ切り痕が残る。胎土には海綿骨針をわずかに含み、焼成はやや甘い。171は杯口縁部破片である。172は体部破片である。

173は古代土師器碗底部であろうか。胎土は砂粒をわずかに含み、浅黄色を呈する。174は棒状尖底製塙土器棒状脚である。太いタイプで、強いナデ調整を施す。胎土は砂粒を含み、浅黄色を呈する。

175～180は越中瀬戸焼壺類。175は口縁部が若干くびれ、肩部で彎曲する。176は体部破片で、火を受けたためか、内外面灰色を呈する。177～180は底部破片で、糸切り痕が残る。いずれも17～18世紀のものと考えられる。

181は唐津焼擂鉢。口縁端部外面が丸く肥厚し、正縁状になるものである。口縁部外面に鉄錆を施す。御目溝は細い。17世紀後半のものと考えられる。

182～187は肥前系磁器碗。182・183は口縁部破片である。182は外面は草花文である。183はコンニャク印判を用いる松文であろうか。184は底部破片である。外面に文様、高台内に一重圓線が認められる。高台端部に砂が残っており、重ね積みして焼成した跡であろうか。185～187は口縁部破片である。内外面とも無文である。いずれも18世紀のものと考えられる。

188は砾石である。189は鉄製品である。刀子であろうか。

(3) 式掘調査出土遺物（第17図）

190～192は古代須恵器。190は蓋である。頂部と口縁部との境に稜があり、口縁端部を引き出すタイプであろうか。191は杯B底部である。高台は貼り付けで、外下方に踏ん張る。192は瓶類で貼り付け高台を有し、体部は緩やかに立ち上がる。いずれも焼成は良好で灰色を呈する。

193・194は古代土師器。193は内黒碗底部である。体部は直線的に立ち上がる。内面はミガキ、黒色処理が施されている。胎土は海綿骨針をわずかに含み、外面はにぶい赤褐色を呈する。194は甕口縁部破片である。端部は方形を呈する。胎土は砂粒、海綿骨針を少量含み、にぶい橙色を呈する。

195・196は中世上師器皿。195は胎土は海綿骨針をわずかに含み、にぶい橙色を呈する。196は胎土は砂粒、海綿骨針を少量含み、にぶい黄橙色を呈する。195は15世紀前半、196は15世紀後半のものと考えられる。

197は中世珠洲焼擂鉢。口縁端部は肥厚した三角頭を呈し、内端面に波状文を施す。胎土は砂粒、海綿骨針をわずかに含む。IV～V期（1380年代～1440年代）のものと考えられる。

198は古瀬戸印花文合子身。線刻文、貼花文を交互に貼付している。胎土は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。14世紀前半のものと考えられる。市内の中尾新保谷内遺跡に類似品が見られる。

199は唐津焼皿。胎土は黄灰褐色、釉は灰オリーブ色を呈する。17世紀後半～18世紀のものと考えられる。

第4章　まとめ

調査で得られた見解を整理しまとめにかえたい。

1. 造構について

SX01については、須恵器食器・貯蔵具、上師器煮炊具、製塩土器が出土している事から、集落に関連する造構と思われ、時期は8世紀後半～9世紀前半に比定される。

旧河道02・03については、丘陵に対してほぼ直交する事、古代の遺物の出土量が多い事から、川からの流水によるものと考えられる。

2. 墓古土器について

平成15年度調査区のSX01から3点、包含層から1点の墓古土器、SX01から2点の転用硯が出土した。点数が少ないため類例を探し、時期が推定できないかと考えた。うち判読できる3点について見てみる。はっきりと判読できるものは(13)の「東人」のみである。人名に関する墓古は8世紀後半～9世紀前半に集中し、「～人」については9世紀半ばには見られなくなる事、(53)が「子」であるとすれば、県内、石川県の8世紀後半～9世紀前半の遺跡においても出土している事、また、転用硯(41)は杯B身を逆転させて使用しており、9世紀の使用法である事から、本遺跡の墓古土器は8世紀後半～9世紀前半のものが主体となるであろう。

3. 製塩土器について

固化できるもので、SX01から5点、旧河道02・03、平成16年度調査区からそれぞれ1点ずつ棒状尖底製塩土器棒状脚が出土した。SX01からは、上師質の破片も多量に出土しており、製塩土器体部の可能性もある。今回の調査の結果では、炉跡が確認できなかった事から、消費地であると考えられる。布勢水海を経由する水運を利用して運ばれてきたのであろうか。棒状脚は7世紀～8世紀に見られるものであるが、共伴する須恵器が8世紀後半～9世紀前半である事を考えると、平底製塩土器が出現した時期であり、不明上師器片の中には、平底製塩土器があるのかもしれない。

4. 特徴的な遺物について

仏教の様相を取り入れた、沈線が施された須恵器(14)(56)、内面に特殊なて具を使用した須恵器壺(111)、特徴的な肥前系磁器鉢(139)(167)、古瀬戸印花文合子身(198)がある。中でも、注目するのは、出土例の少ない古瀬戸印花文合子身である。この地まで瀬戸焼の流通が及んでいた事が推定される。

5. 調査地区について

平成15年度調査、16年度調査、試掘調査において、出土遺物の構成が異なる。丘陵上では近世の遺物、丘陵裾では古代の遺物、平野では中世の遺物の比率が高い。遺物の帰属年代は、古代は8～9世紀、中世は14～15世紀、近世は17～19世紀に比定される。丘陵上からは中世の遺物は出土しておらず、中世の主体は遺跡の平野部と考えられる。

今回の調査からはわずかではあったが、古代以降の栗原地区の様子を窺うことができた。この成果が、今後の調査、研究につながることを期待する。

引用・参考文献

- 愛知県陶磁資料館 2002 「中世の施釉陶器－瀬戸・美濃－」
- 穴水町教育委員会 1997 「美麻奈比古神社前遺跡」
- 池野正男 1987 「射水丘陵における8世紀後半の須恵器窯跡」『大境』 第11号 富山考古学会
- 石川県埋蔵文化財保存協会 1997 「石川県出土文字資料集成」
- 柳山祐司 2001 「須恵器の叫き日から」『北陸古代土器研究』 第9号 北陸古代土器研究会
- 金沢市埋蔵文化財センター 1998 『上岸屋遺跡Ⅲ』 金沢市文化財紀要140
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－」
- 近藤義郎 1994 『日本土器製塩研究』 青木書店
- 瀬戸市史編纂委員会 1981 『瀬戸市史』 陶磁史編 二
- 辰口町教育委員会 2005 「和気後谷山窯跡群」
- 富山県文化振興財团 1996 「梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）」 埋蔵文化財発掘調査報告第7集
- 富山県文化振興財团 2003 「能越自動車道関連 埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告」 埋蔵文化財発掘調査報告第20集
- 富山県文化振興財团 2003 「埋蔵文化財調査概要－平成14年度－」
- 富山県文化振興財团 2004 「中谷内遺跡発掘調査現地説明会資料」
- 富山県文化振興財团 2005 「上久津呂中屋遺跡 現地説明会資料」
- 富山県文化振興財团 2005 「大規模発掘調査の速報屏 古代のかたりべ」
- 富山県文化振興財团 2006 「任海宮山遺跡発掘調査報告1」 埋蔵文化財発掘調査報告第30集
- 中島町教育委員会 1995 「ヤトン谷内遺跡」
- 氷見市 2002 「氷見市史」 7 資料編5 考古
- 氷見市教育委員会 2003 「氷見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅲ」 氷見市埋蔵文化財調査報告第39冊
- 氷見市教育委員会 2004 「氷見市埋蔵文化財分布調査報告（丘陵地区）Ⅳ」 氷見市埋蔵文化財調査報告第40冊
- 氷見市教育委員会 2005 「鞍川中A遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅰ」 氷見市埋蔵文化財調査報告第41冊
- 氷見市教育委員会 1993 「氷見の指定文化財ハンドブック」
- 婦中町教育委員会 2004 「砂子田Ⅰ遺跡発掘調査報告」
- 北陸中世土器研究会編 1997 「中・近世の北陸 考古学が語る社会史」 桂書房
- 宮川彩子 1998 「石川県出土墨書き器の基礎的検討」 『古代北陸と出土文字資料』 石川県埋蔵文化財保存協会
- 宮田進一 1997 「越中瀬戸の変遷と分布」「中・近世の北陸 考古学が語る社会史」 桂書房
- 望月精司 1998 「古代の脱と墨書き器」「古代北陸と出土文字資料」 石川県埋蔵文化財保存協会
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館

はじめに

粟原A遺跡は、仏生寺川支流の万尾川上流左岸に立地する。遺跡からは、古墳時代後期から古代の須恵器類、珠洲、砥石などの遺物が出土している。今回は、石器石材を対象として肉眼による石材鑑定を行い、产地について検討した。

1. 試料

観察を行った石器類は、砥石とされる石材 1 点である。石材の出土地点、長さ(cm)、幅(cm)、高さ(cm)、重量(g)などの詳細を石材鑑定結果と併せて表に示す。

2. 分析方法

野外用のルーペを用いて構成鉱物や組織の特徴を観察し、肉眼で鑑定できる範囲の岩石名を付す。

3. 結果

肉眼観察による各試料の鑑定結果を表に示した。砥石とされた石材が流紋岩と鑑定された。

番号	実測番号	遺跡	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	石質	縦考
1	188	AWA	12C 2層	砥石	7.8	3.6	2.5	78	流紋岩	古代以降

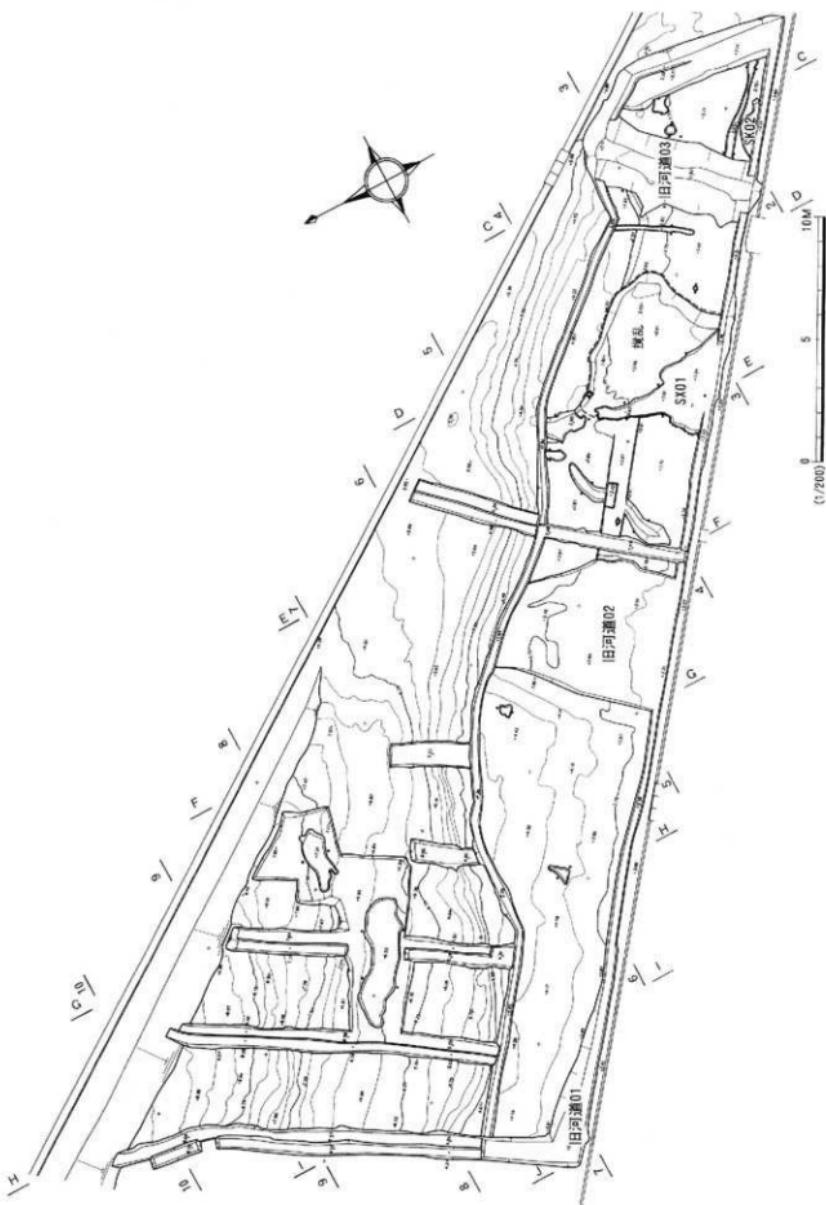
4. 考察

粟原 A 遺跡の近傍を流れる万尾川の水系には、新第三紀中新世の音川累層や、鮮新世の氷見累層が分布する(角ほか、1989)。音川累層は砂岩、シルト岩、凝灰質岩などからなり、万尾川流域には上部～最上部層が分布する。氷見累層は、固結度の低い中～粗粒砂岩や、石灰質砂岩などから構成されている。

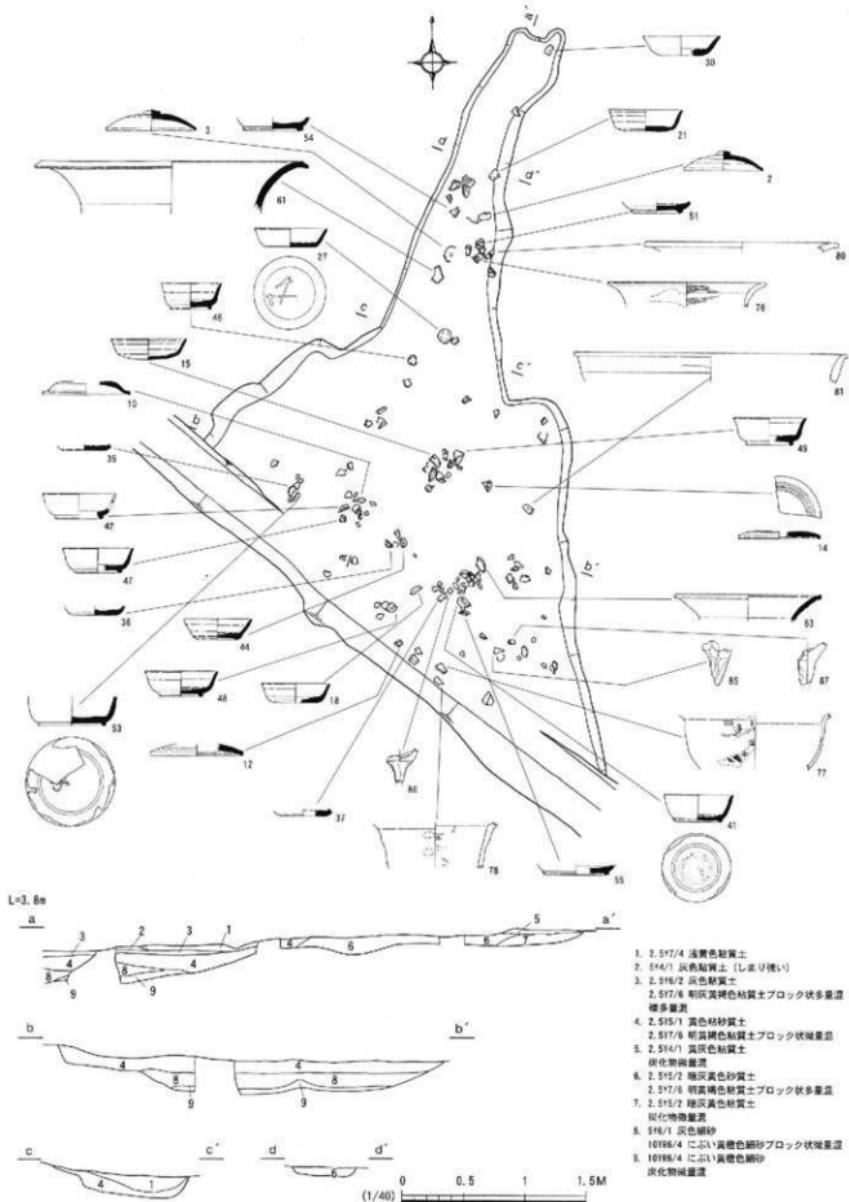
万尾川水系の地質はこのように堆積岩類や火山碎屑岩類などから構成されているため、火山岩である流紋岩は、採取できない石材であり、搬入品と考えることができる。この石材が入手できる地域としては、小矢部川下流域が考えられる。小矢部川水系には、古第三紀晚新世の流紋岩類を主体とする太美山累層、新第三紀中新世の安山岩類・同質火碎岩類を主体とする岩稈層、流紋岩類を主体とする医王山層、および、堆積岩類を主体とする中新統などが分布している(鹿野ほか、1999)。流紋岩の産地としては、太美山累層や医王山層が有力であり、小矢部川の河床疊として採取された可能性が高いと考えられる。

引用文献

- 鹿野和彦・原山 智・山本博文・竹内 誠・宇都浩三・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久. 1999. 20 万分の 1 地質図幅「金沢」. 地質図幅. 地質調査所.
- 角 靖夫・野沢 保・井上正昭. 1989. 石動地域の地質. 地域地質研究報告(5 万分の 1 地質図幅). 地質調査所.



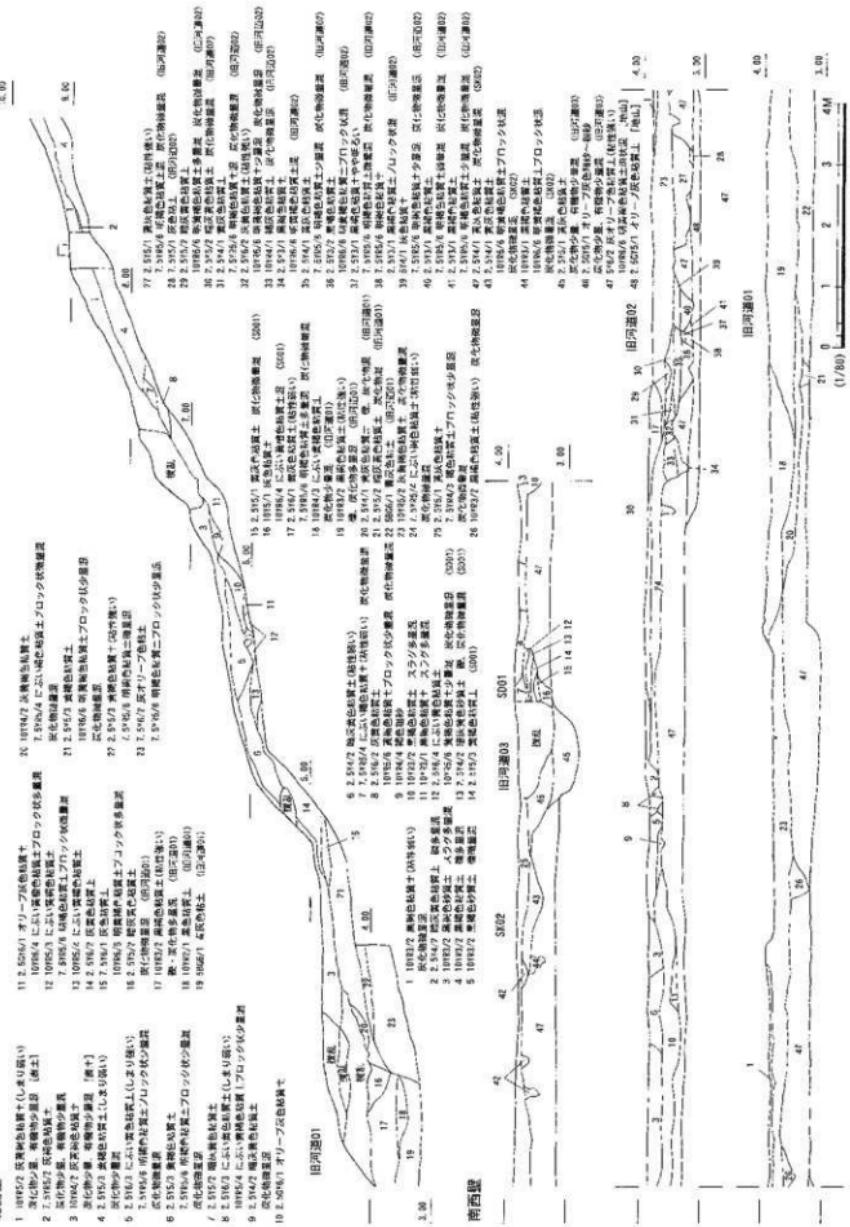
第4図 平成15年度調査区 遺構配置図(S=1/200)

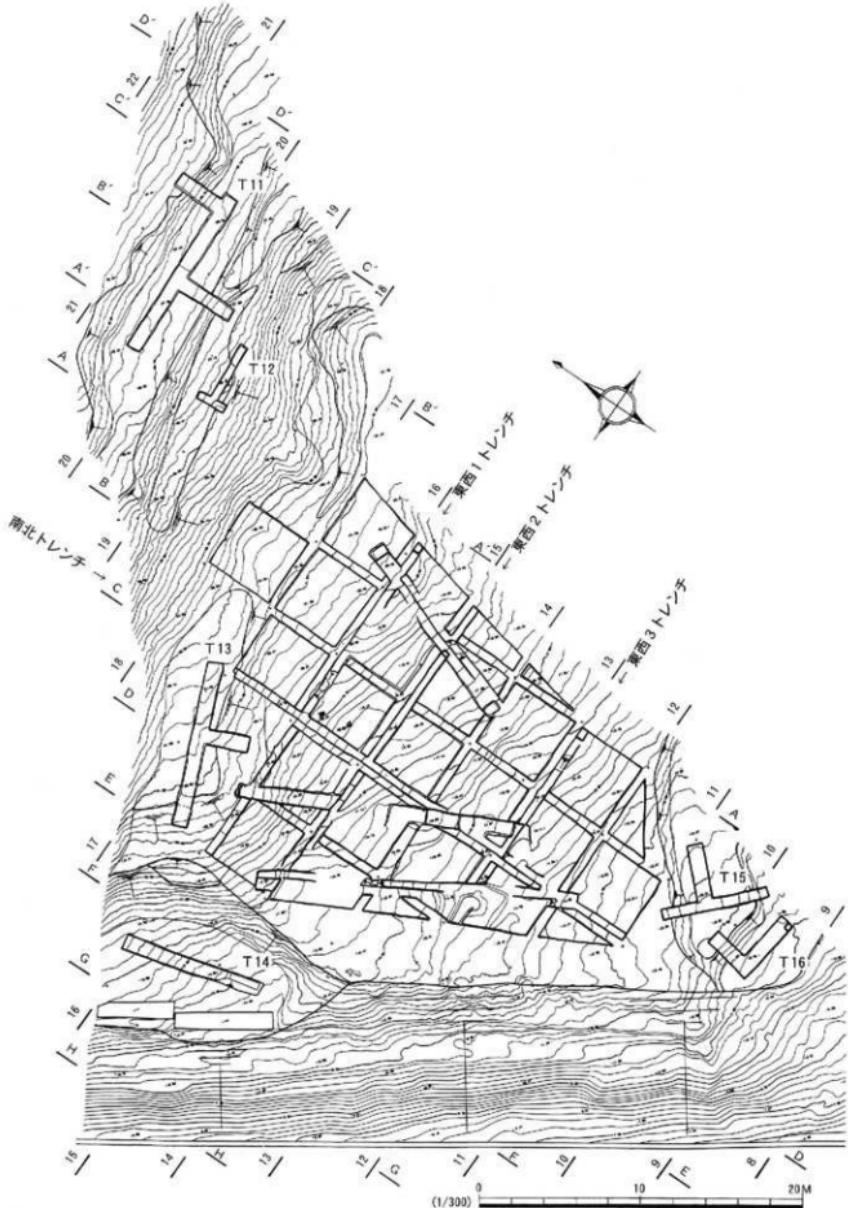


第5図 平成15年度調査区 SX01遺物出土状況・土層断面図(S=1/80), 主な遺物の出土位置(S=1/8)

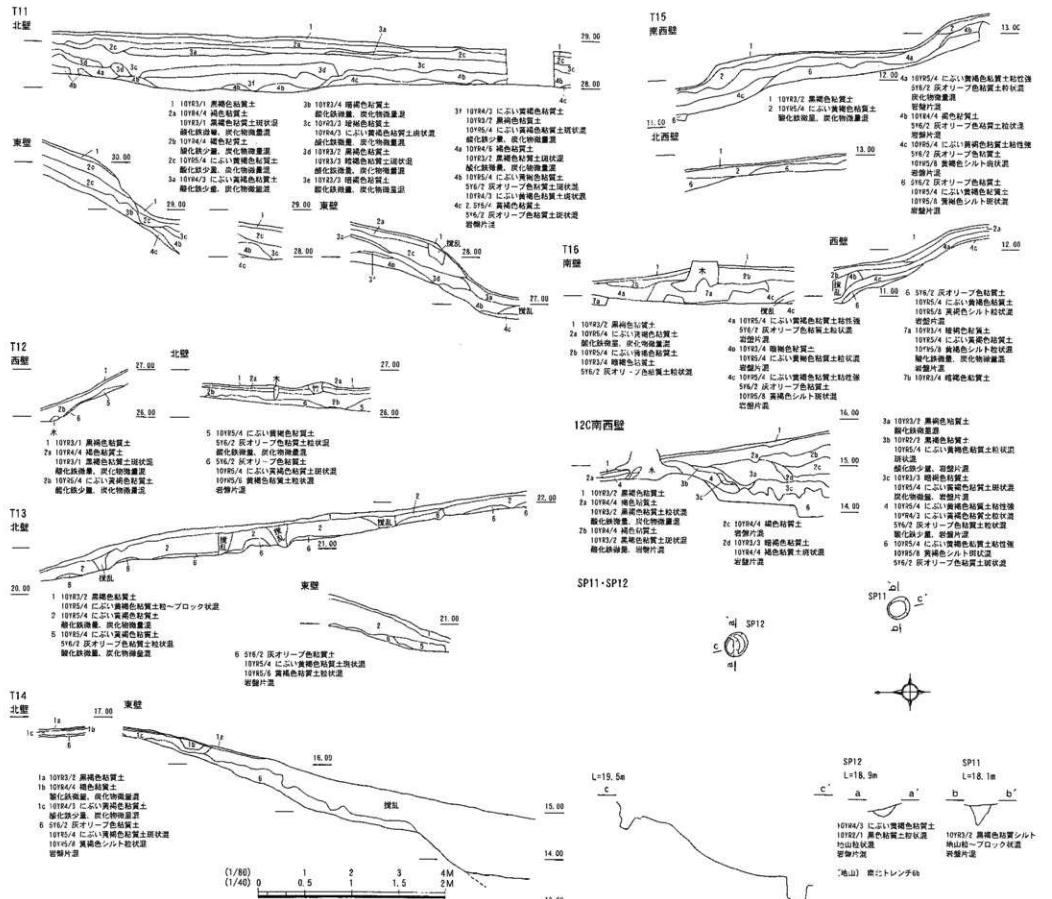
北西端

第6図 平成15年度調査区 北西端・南西壁土層断面図(S=1/80)



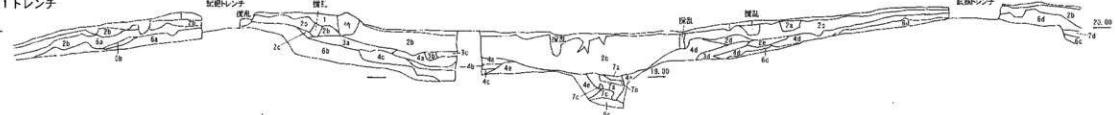


第7図 平成16年度調査区 全体図 ($S = 1/300$)



第8図 平成16年度調査区 トレンチ断面図 (S=1/80) SP11・SP12平面図・エレベーション・断面図 (S=1/40)

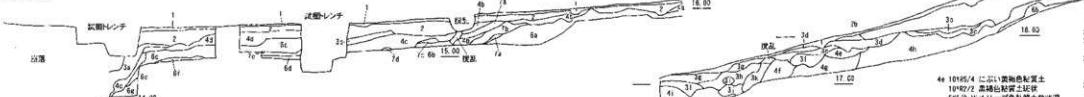
東西1トレチ



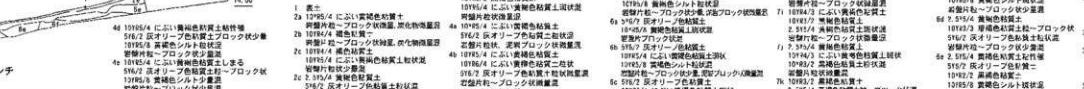
東西2トレチ



東西3トレチ



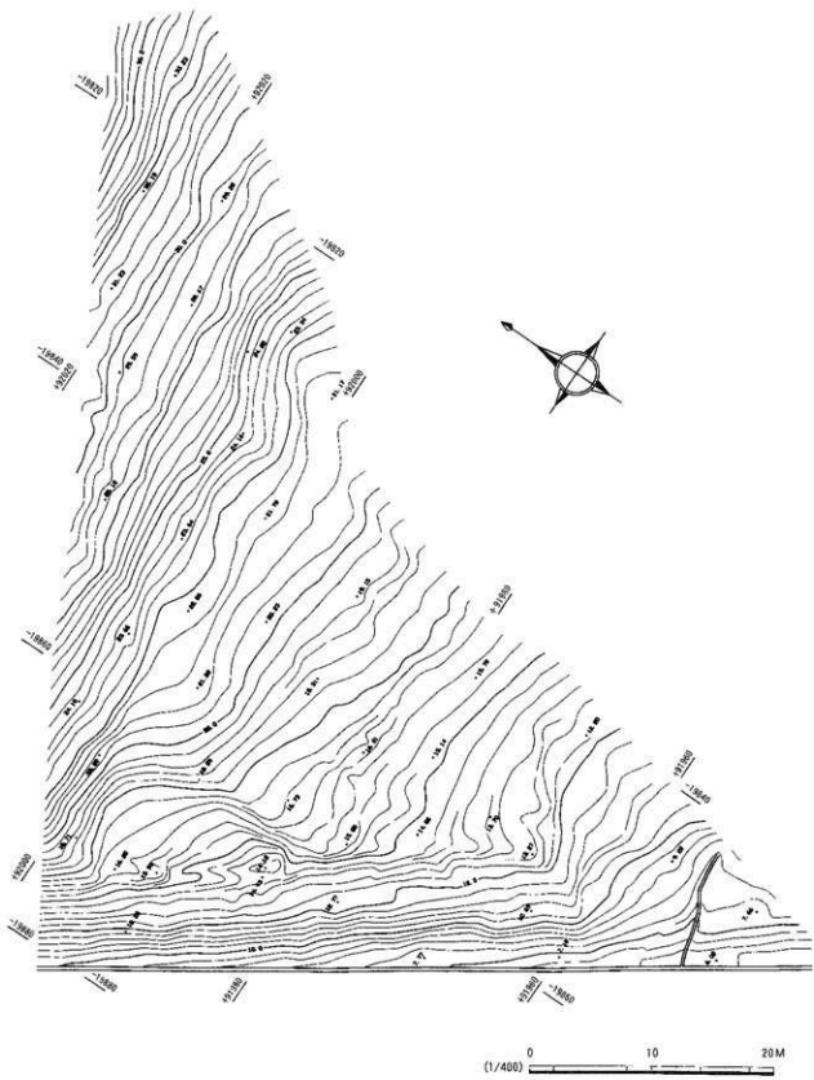
南北トレチ



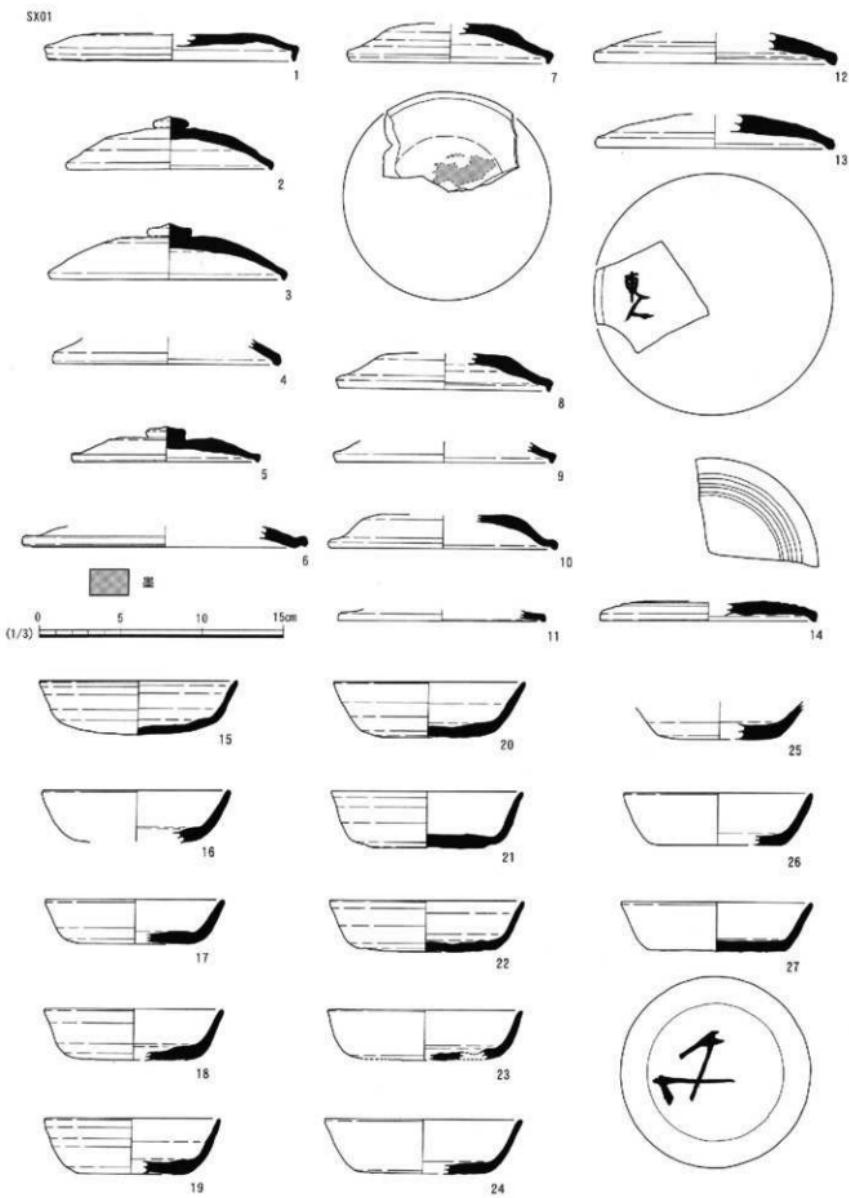
東西1トレチ



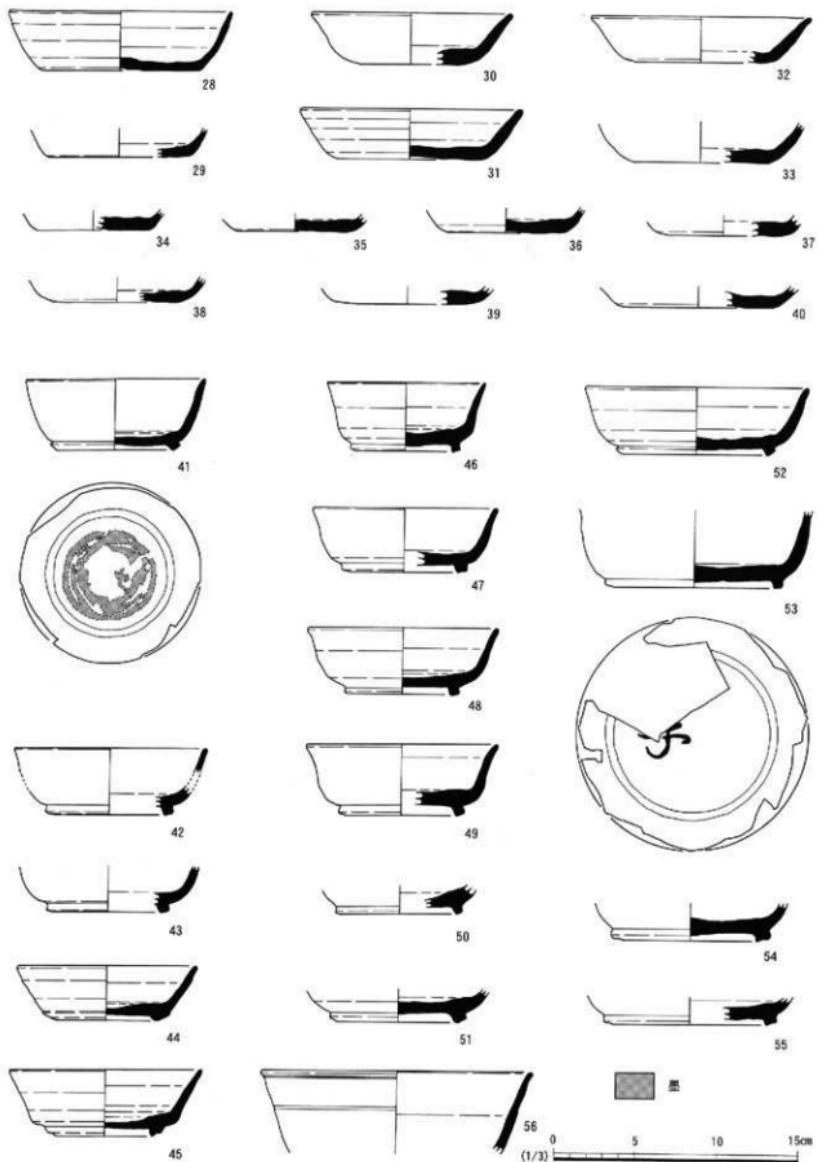
第9図 平成16年度調査区 東西・南北トレチ土層断面図 (S=1/60)



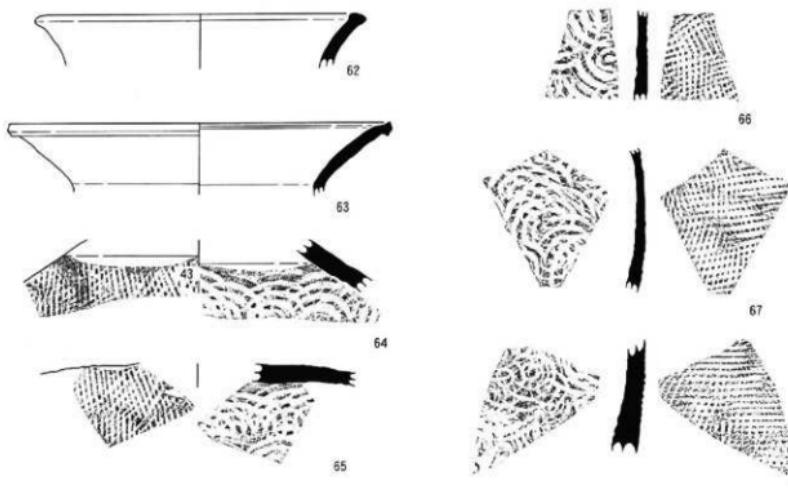
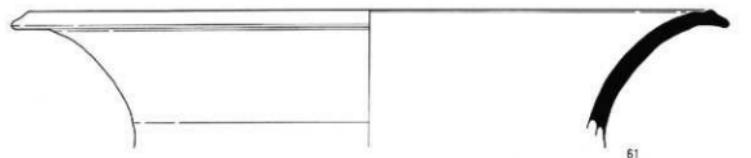
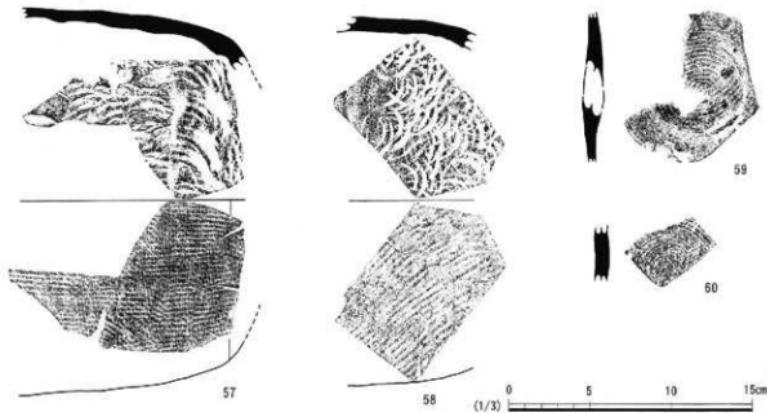
第10図 平成16年度調査区 丘陵斜面調査前測量図 ($S = 1/400$)



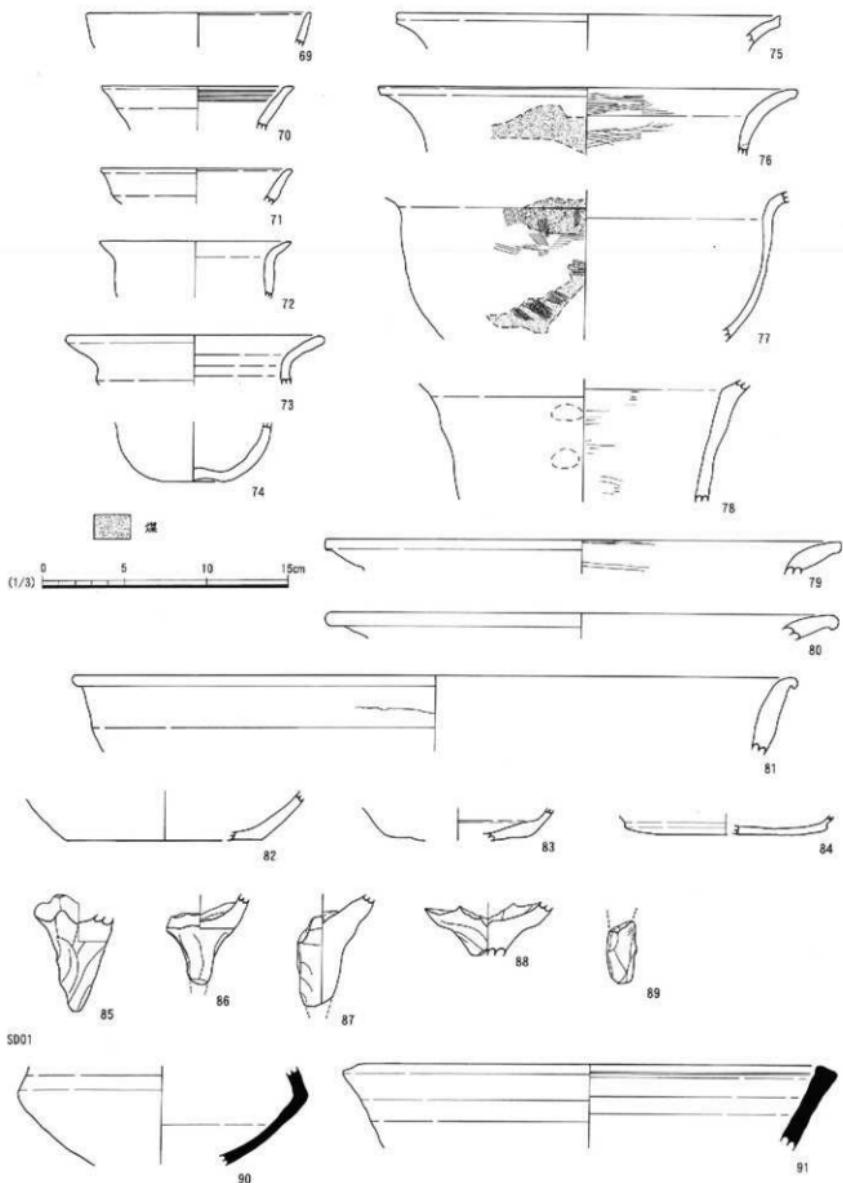
第11図 遺物実測図（1）(S=1/3)



第12図 遺物実測図（2）（S=1/3）

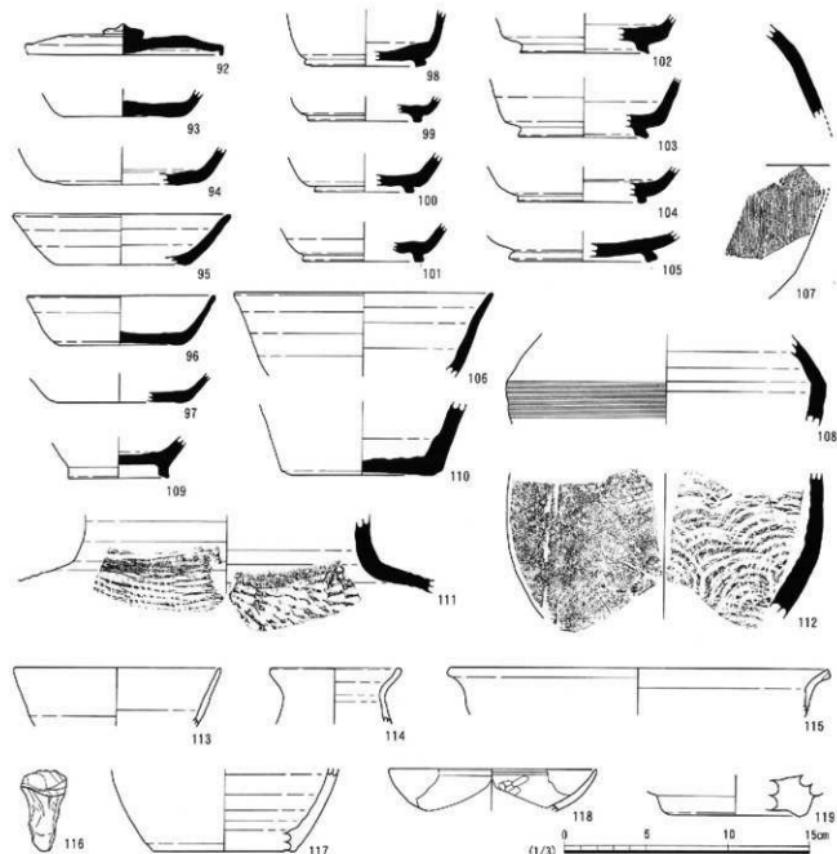


第13図 遺物実測図 (3) ($S=1/3$)

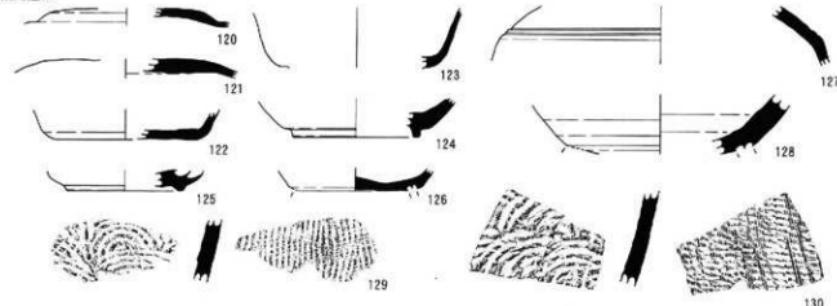


第14図 遺物実測図 (4) (S=1/3)

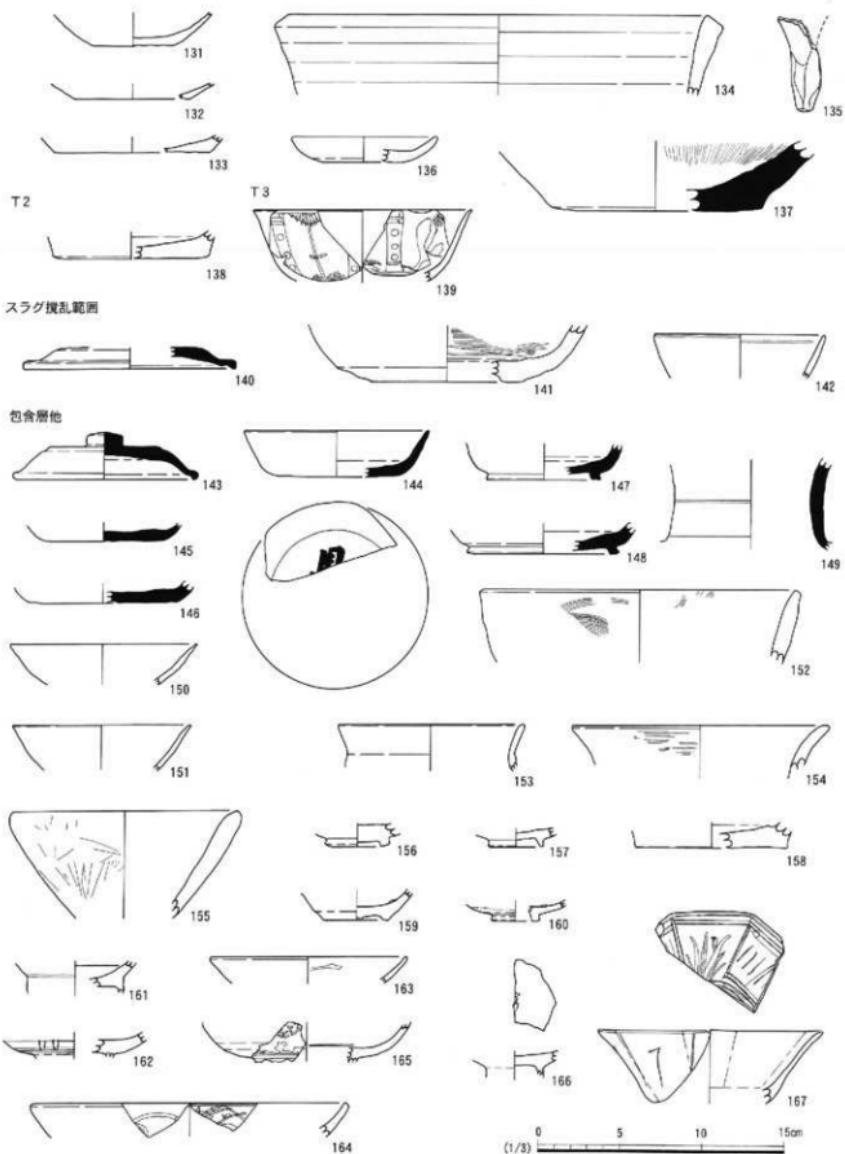
旧河道02



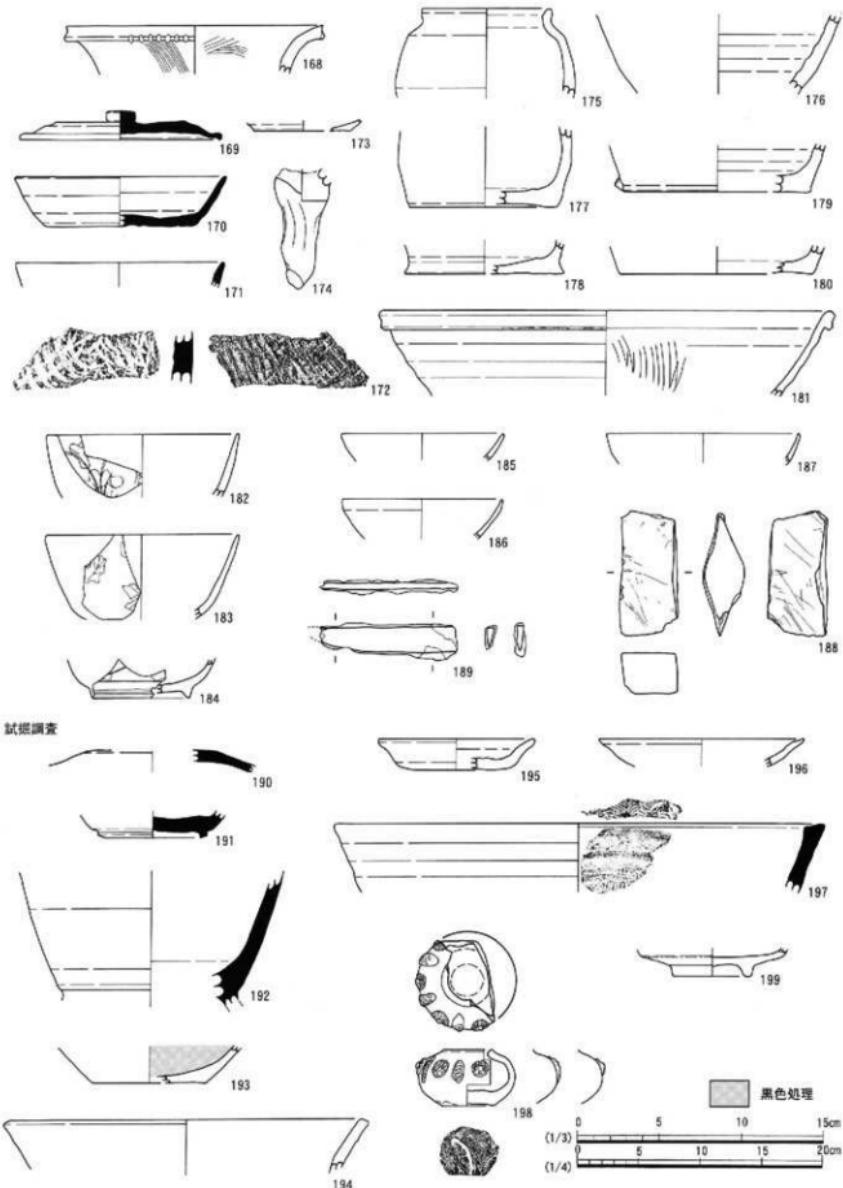
旧河道03



第15図 遺物実測図(5) (S=1/3)



第16図 遺物実測図（6）(S=1/3)



第17図 遺物実測図（7）(189はS=1/2, 197はS=1/4, その他はS=1/3)



図版1 遺跡周辺空中写真（1947年撮影）国土地理院

この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平17 北接 第265号



図版2 遺跡周辺空中写真（1975年撮影）国土地理院

この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を複製したものである。（承認番号）平17 北緯 第265号



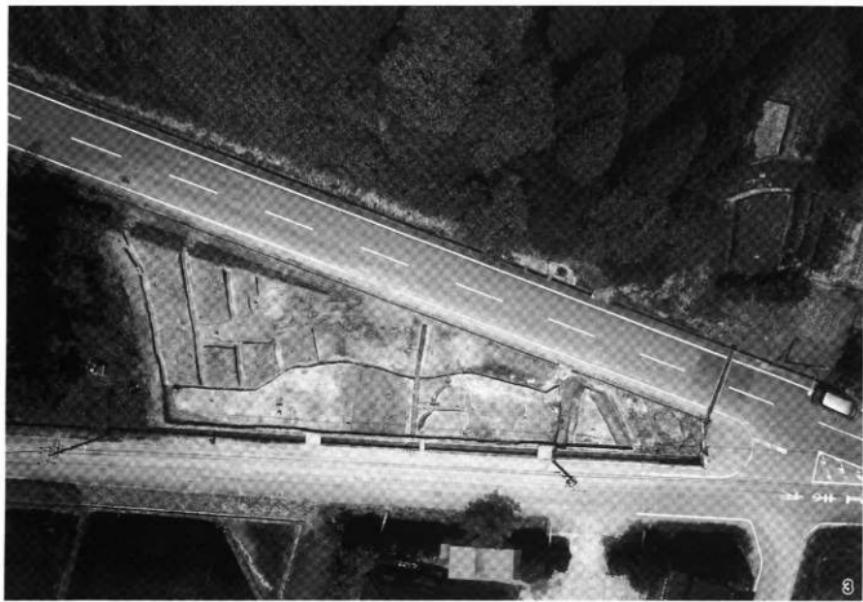
図版3 1. 平成16年度調査前遠景 西から
2. 平成15年度調査前近景 南から



1

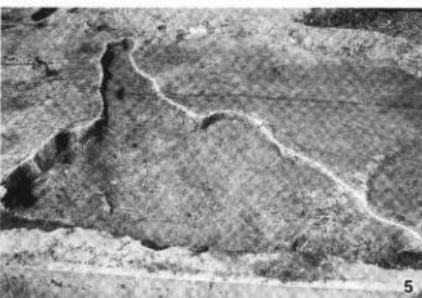
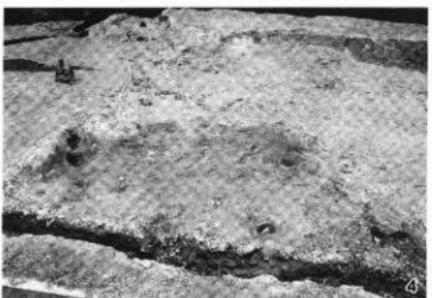


2



3

図版4 1. 平成16年度調査後遠景 南西から
2. 平成16年度調査後鳥瞰風景（上久津呂中屋遺跡方向を望む）
3. 平成15年度調査区全景

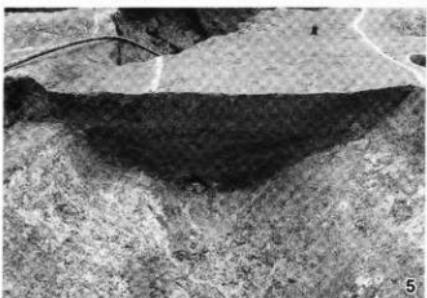
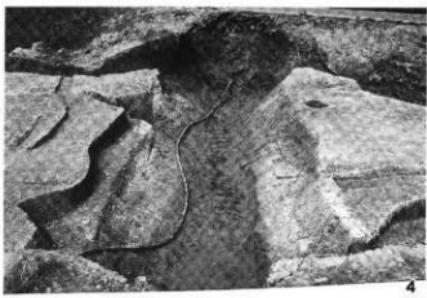


図版5 平成15年度調査区（1）

1. 北西壁中央 南東から
3. 南西壁北端 北から
4. SX01 検出状況 南西から
6. SX01 遺物出土状況 南西から

2. 北西壁完掘後（T1） 南西から

5. SX01 完掘状況 南西から
7. SX01 b-b' 土層断面 南西から



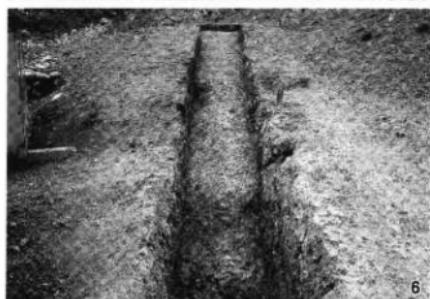
図版6 平成15年度調査区（2）

1. 旧河道02完掘状況 南西から
3. 旧河道02底直上 遺物出土状況
5. 旧河道03土層断面 南西から
7. 墨書き器（144）出土状況

2. 南西壁（旧河道02土層断面）北東から
4. 旧河道03完堀状況 南西から
6. 旧河道03底直上 遺物出土状況
8. 作業風景



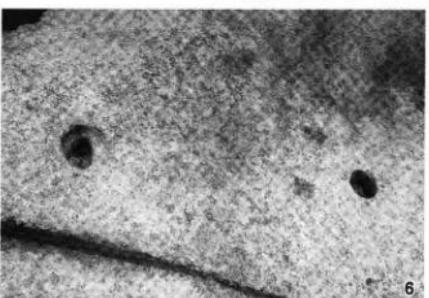
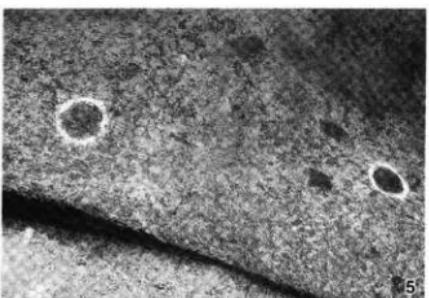
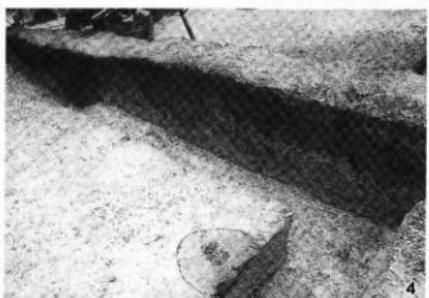
図版7 1. 平成16年度調査前現況
2. 平成16年度調査区全景



図版 8 平成16年度調査区 (1)

- 1. 中央部緩斜面 南から
- 3. T11完掘状況 北東から
- 5. T13完掘状況 北東から
- 7. T15完掘状況 南東から

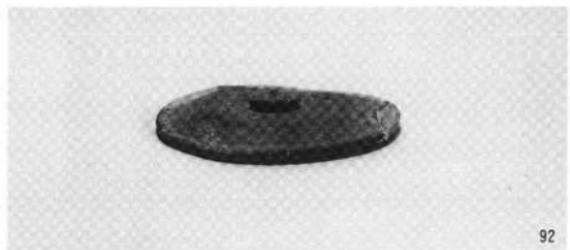
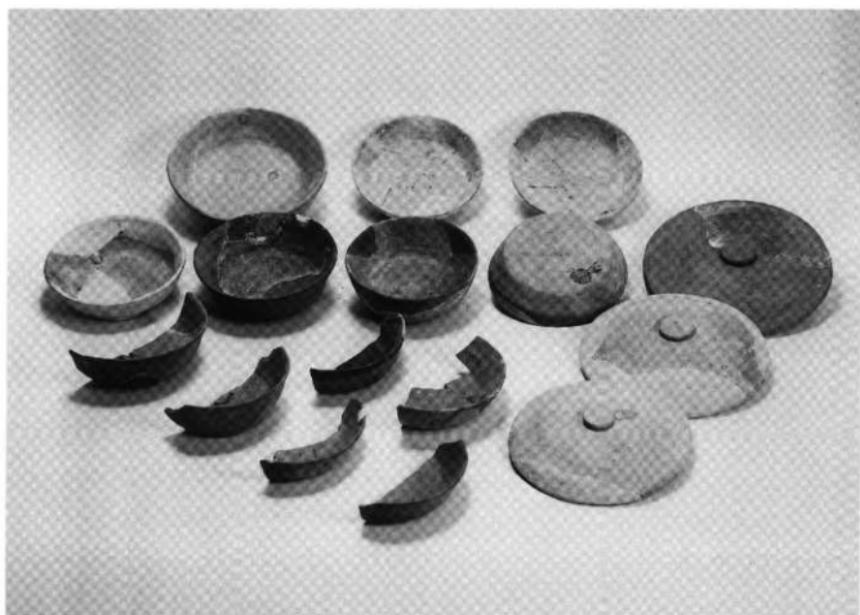
- 2. 中央部緩斜面 北東から
- 4. T12完掘状況 東から
- 6. T14完掘状況 南東から
- 8. T16完掘状況 西から



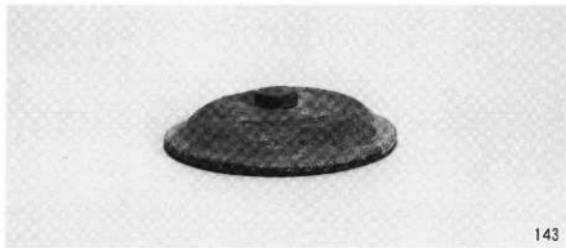
図版 9 平成16年度調査区（2）

1. 東西1トレンチ 北壁西端 南西から
3. 東西3トレンチ 北壁東端 南西から
5. S P11, 12検出状況 西から
7. 作業風景

2. 東西2トレンチ 北壁中央 南東から
4. 南北トレンチ 西壁中央 北東から
6. S P11, 12完堀状況 西から
8. 作業風景

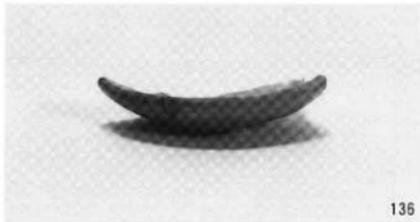
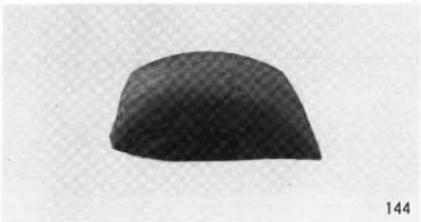
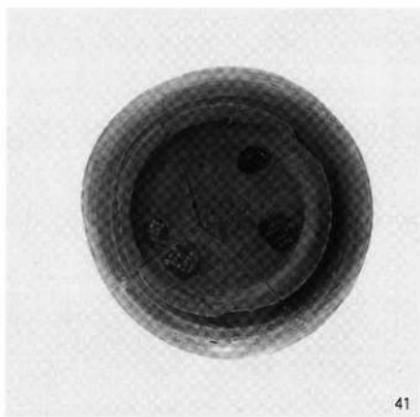
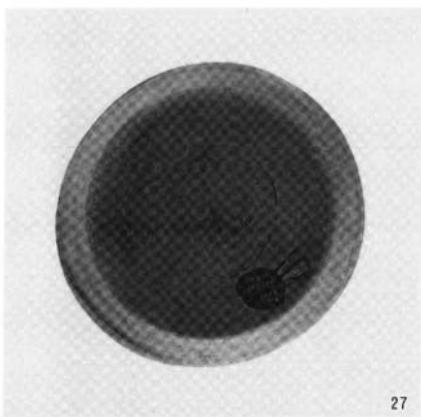
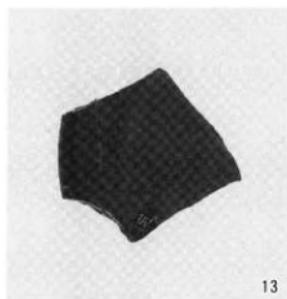


92

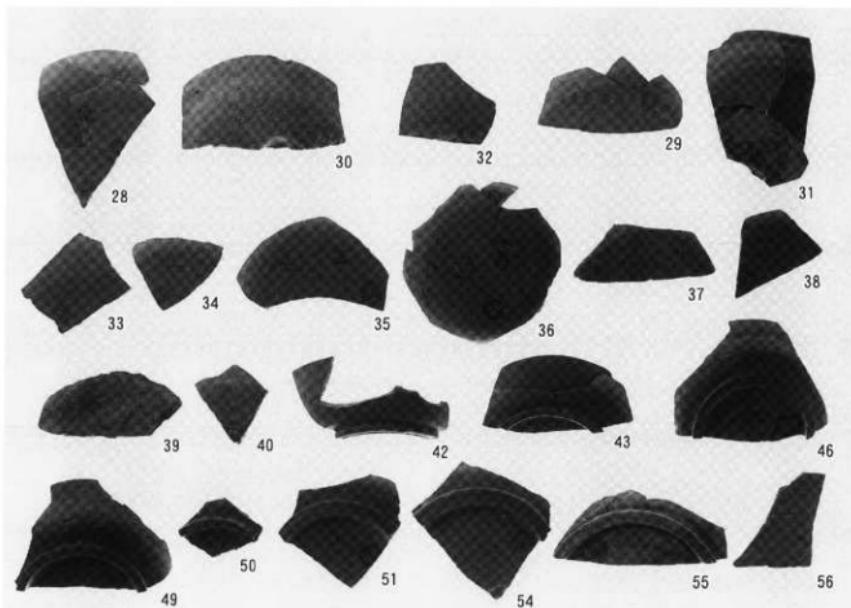
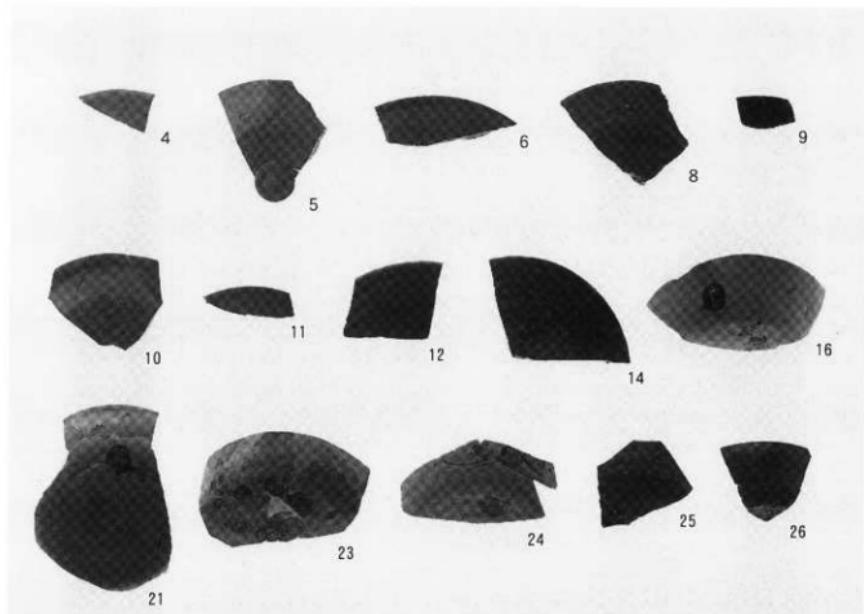


143

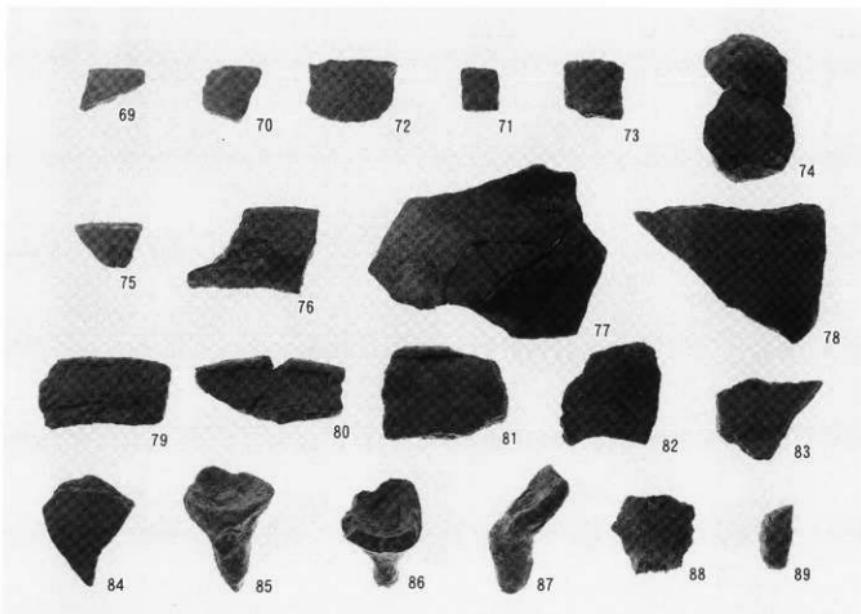
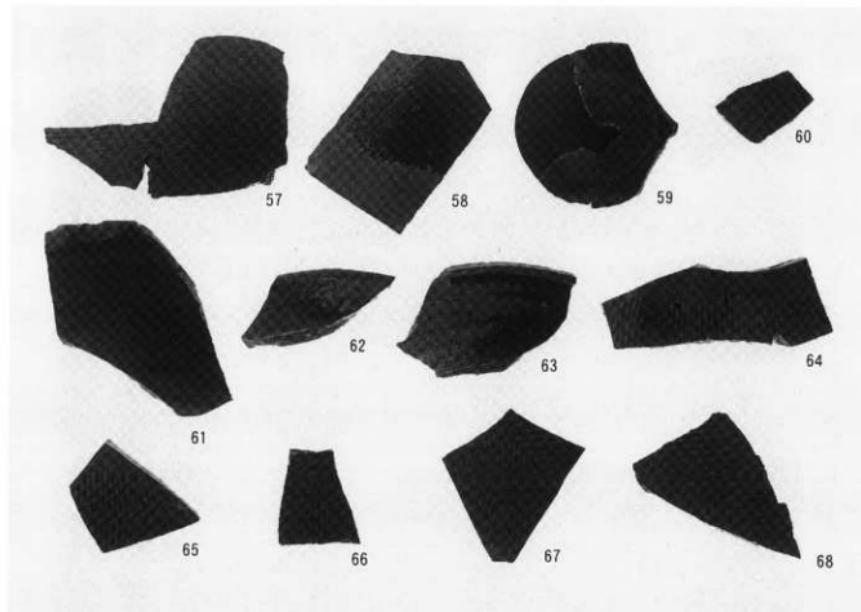
図版10 遺物写真（1）



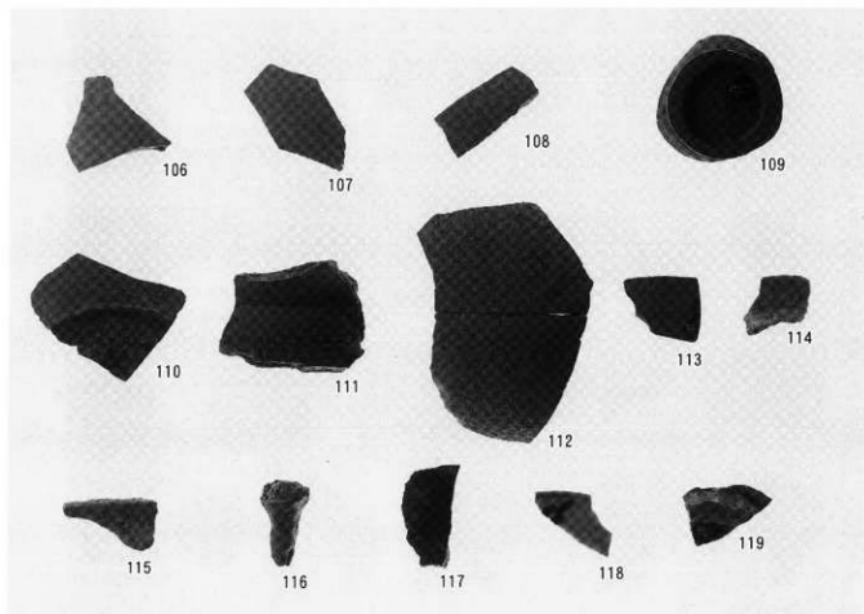
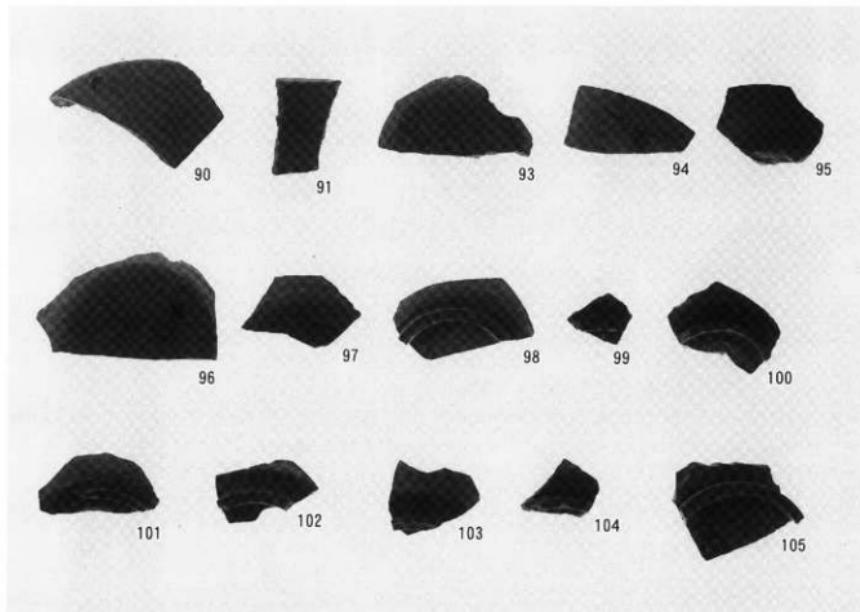
図版11 遺物写真（2）



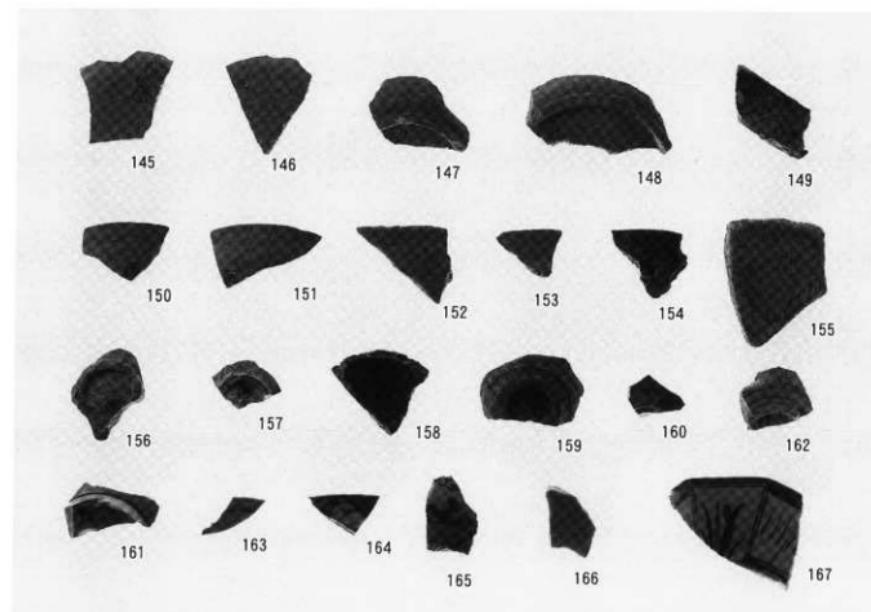
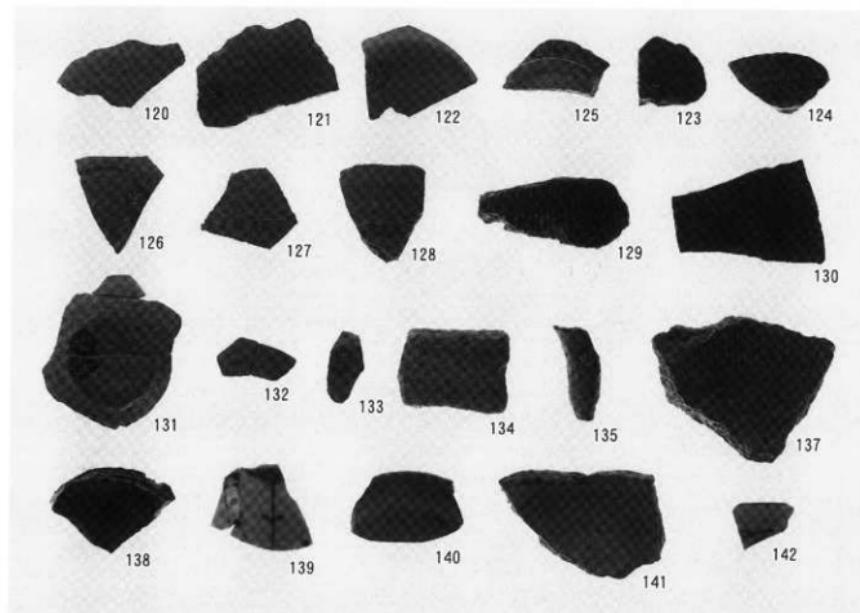
図版12 遺物写真（3）



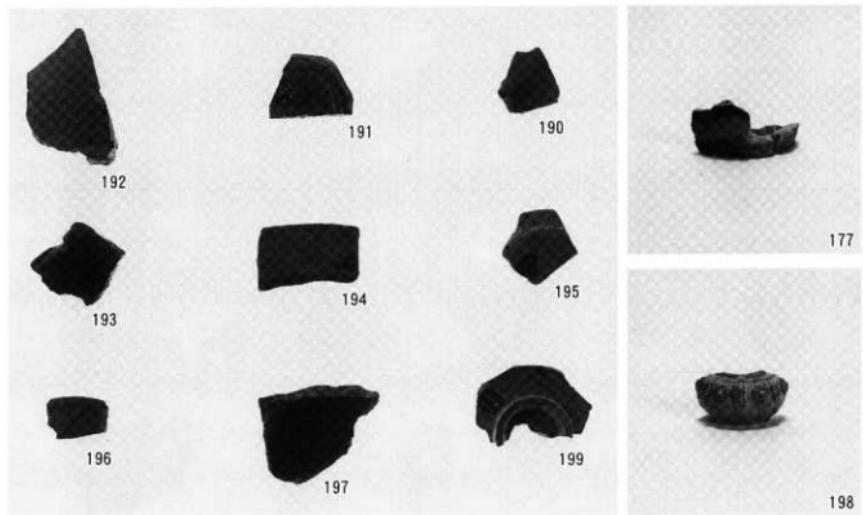
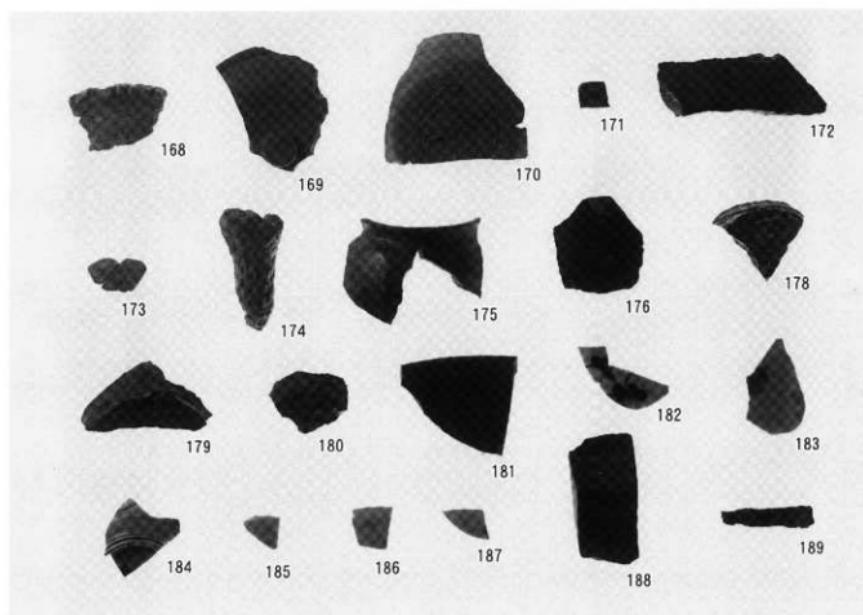
図版13 遺物写真 (4)



図版14 遺物写真（5）



図版15 遺物写真（6）



图版16 遗物写真（7）

報告書抄録

ふりがな	あわらえーいせき						
書名	栗原A遺跡						
副書名	能越自動車道建設に伴う発掘調査報告						
巻次	II						
シリーズ名	水見市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第47冊						
編著者名	河竹 明子、大高崎 泰明						
編集機関	水見市教育委員会						
所在地	〒935-0016 富山県水見市本町4番9号 TEL0766(74)8215						
発行年月日	2006年3月31日						
ふりがな 所収遺跡	所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積	調査原因
栗原A 遺跡	富山県水見市 栗原	16205	36° 49' 45"	136° 56' 38"	20030612	約500m ²	道路建設
					20030820		
					20040906	約1,230m ²	20041217
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
栗原 A 遺跡	散布地	古代 中世 近世	流路、土坑 ・小穴など	須恵器 古代土師器 珠洲焼 中世土師器 近世越中瀬戸焼			

平成18年3月15日 印刷

平成18年3月31日 発行

栗原A遺跡
水見市埋蔵文化財調査報告書第47冊

編集・発行 水見市教育委員会
〒935-0016
富山県水見市本町4番9号
TEL0766(74)8215

印刷 有限会社 ひみ印刷社